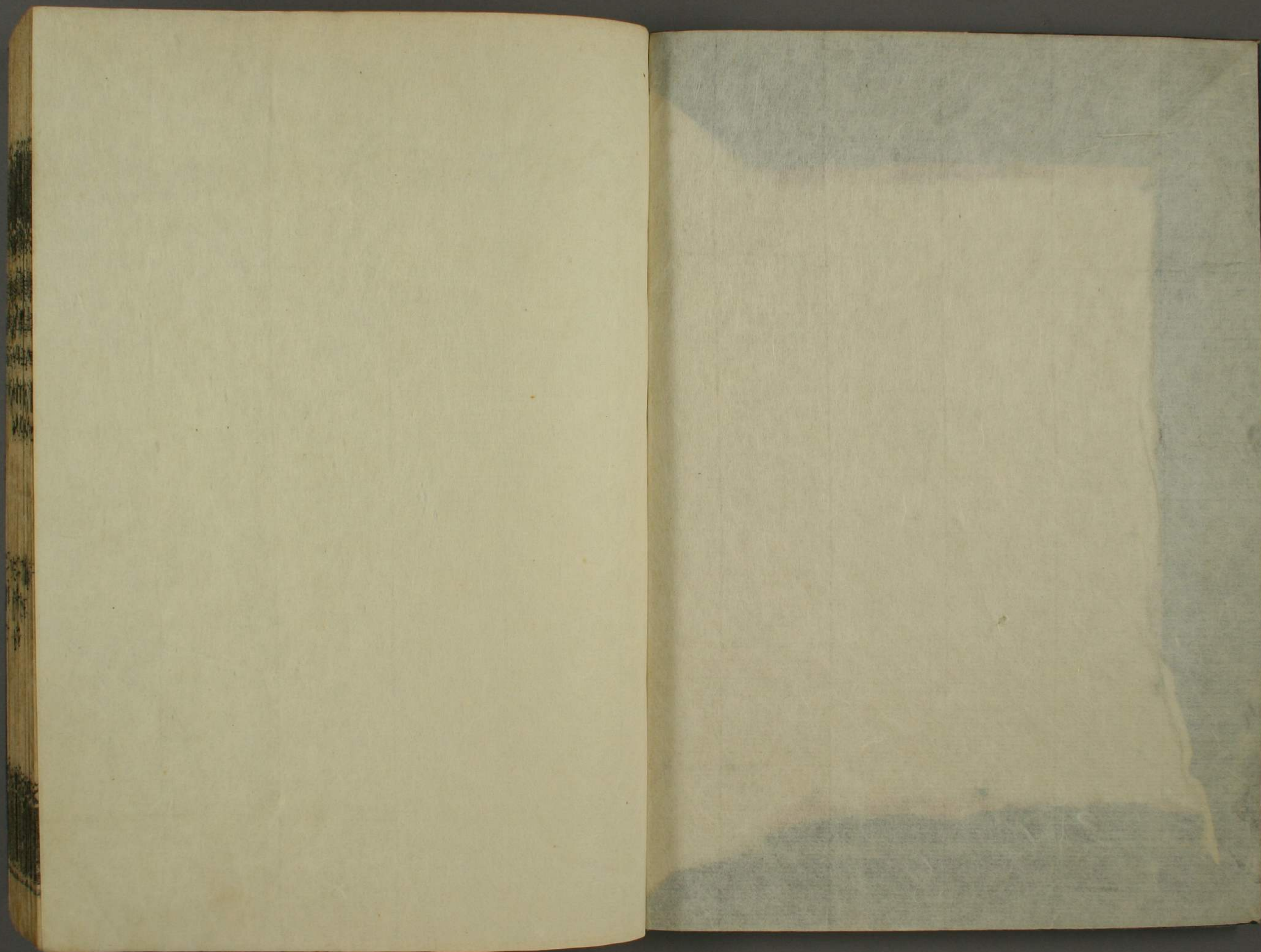


東鑑

伊
402
24

伊
402
25-24





門存
號402
卷24



同會

新刊吾妻鏡卷第四十九

正元二年庚申

四月十三日。為文應

正月六



一日 巳巳晴 挽飯相州禪室 兩國司并 評定泉

以下人々著布衣。出仕。列候庭上之儀。如恒。

武藏前司 尾張前司

相摸太郎 新相摸三郎

相摸三郎 遠江前司

陸奥左近大夫將監 越後守

彈正少弼 武藏左近大夫將監

尾張左近大夫將監 遠江右馬助

刑部少輔 越前々司

東鑑四十九

越後四郎
遠江七郎
駿河四郎
駿河五郎
長井宮内權大夫
中務權少輔
木工權頭
那波刑部少輔
後藤壹岐前司
長井判官代
安藝右近大夫
上総前司

武藏五郎
備前三郎
越後又太郎
新田三河前司
秋田城介
武藤少卿
和泉前司
小山出羽前司
伊賀前司
日向前司
鳴津大隅前司
周防前司

縫殿頭

後藤壹岐新左衛門尉
周防三郎左衛門尉
筑前次郎左衛門尉
城六郎
筑前三郎左衛門尉
筑前四郎左衛門尉
小野寺四郎左衛門尉
常陸次郎左衛門尉
上野太郎左衛門尉
善右衛門尉
善次郎左衛門尉

甲斐守

上総三郎左衛門尉
城四郎左衛門尉
周防五郎左衛門尉
周防六郎左衛門尉
城弥九郎
式部太郎左衛門尉
大隅藏人
小野寺新左衛門尉
出羽七郎左衛門尉
和泉六郎左衛門尉
薩摩七郎左衛門尉

和泉七郎左衛門尉	薩摩十郎
土肥四郎	内藤肥後三郎左衛門尉
狩野五郎左衛門尉	伊東次郎左衛門尉
伊勢三郎左衛門尉	狩野四郎左衛門尉
信濃次郎左衛門尉	鎌田圖書左衛門尉
肥後新左衛門尉	大曾祢太郎左衛門尉
信濃三郎左衛門尉	狩野帶刀左衛門尉
加藤左衛門尉	紀伊次郎左衛門尉
長内左衛門尉	大泉九郎
鎌田次郎左衛門尉	鎌田三郎左衛門尉
進三郎左衛門尉	善五郎左衛門尉
駿河右近大夫	平賀四郎左衛門尉

出羽前司ヲシ行義申時トキ尅將軍家ヲシ出羽前司右衛門ヲシ

督參進上御カミ藤御フジノミ武藏前司ヲシ朝直御調度尾張前ヲシ

同時章御行騰トキ沓越後守實時ヲシ

一御馬	遠江七郎時基 <small>トキ</small> 工藤次郎左衛門尉高光 <small>ヲシ</small>
二御馬	武藏五郎時忠 <small>トキ</small> 安東新左衛門尉 <small>ヲシ</small>
三御馬	出羽七郎左衛門尉行頼 <small>ヲシ</small> 同九郎宗行 <small>ヲシ</small>
四御馬	城四郎左衛門尉時盛 <small>トキ</small> 同六郎顯盛 <small>ヲシ</small>
五御馬	伊勢次郎左衛門尉行經 <small>ヲシ</small> 同三郎左衛門尉頼經 <small>ヲシ</small>

其後覽吉書武州令持衆給今日有御行始之體仍トキ

任例進覽庭上座著倒就御點催供奉人其間事以トキ

上工藤三郎右衛門尉光泰奉行之平足左衛門尉ヲシ

實俊カ子トシ依有故障也カ未剋御出御車網廂

御劔倭人

武藏前司朝直トモナラ

御後

五位

相摸トモ太即時直ナラ

遠江トモ前司時直ナラ

越前トモ々司時廣ナラ

遠江トモ右馬助清時ナラ

陸奥トモ左近ナラ大夫將監義政ナラ

相摸トモ三即時利ナラ

新相摸トモ三即時村ナラ

尾張トモ前司時章ナラ

越後トモ守實時ナラ

刑部トモ少輔教時ナラ

武藏トモ左近ナラ大夫將監時仲ナラ

彈正トモ少弼業時ナラ

遠江トモ七即時基ナラ

越後トモ四即時方ナラ

參河トモ前司頼氏ナラ

宮内トモ權大夫時秀ナラ

小山トモ出羽ナラ前司長村ナラ

木土トモ權頭顯家ナラ

武藏トモ少卿景頼ナラ

甲斐トモ守為成ナラ

秋田トモ城介泰盛ナラ

和泉トモ前司行方ナラ

後藤トモ壹岐ナラ前司基政ナラ

日向トモ前司祐泰ナラ

上総トモ前司長泰ナラ

六位

城トモ四ナラ即左衛門ナラ尉時盛ナラ

同トモ六ナラ即顯盛ナラ

式部トモ太ナラ即左衛門ナラ尉光政ナラ壹岐ナラ新左衛門ナラ尉基頼ナラ

和泉トモ三ナラ即左衛門ナラ尉行章ナラ

信濃トモ次ナラ即左衛門ナラ尉時清ナラ

周防トモ五ナラ即左衛門ナラ尉忠景ナラ

薩摩七郎左衛門尉祐能
 一宮次郎左衛門尉康有
 筑前次郎左衛門尉行賴
 小野寺新左衛門尉行通
 加藤左衛門尉景經
 土肥四郎左衛門尉實經
 出羽三郎左衛門尉行藤
 常陸次郎左衛門尉
 鎌田三郎左衛門尉義長
 鎌田次郎左衛門尉行俊
 武藤左近將監賴村
 御引出物如例御劔刑部少輔教時砂金左近大夫
 將監義政羽宮内權太輔時秀

一御馬 新相摸三郎時村 安保次郎左衛門尉
 二御馬 筑前三郎左衛門尉行實
 同四郎左衛門尉行光
 三御馬 相摸三郎時輔 南條新左衛門尉
 二日 庚午晴 垸飯奥州禪門沙汰御籙左衛門督 御
 劔尾張前司時章 御調度越前々司時廣 御行
 騰香秋田城介泰盛
 一御馬 新相摸三郎時村
 二御馬 備前三郎長頼
 三御馬 薩摩七郎左衛門尉祐能
 同十郎左衛門尉祐廣
 四御馬 信濃次郎左衛門尉時清

五御馬 周防五郎左衛門尉忠景

三日 辛未晴 境飯相州沙汰御簾右金吾

御劔越後守實時御調度左近大夫將監公時御行

騰和泉前司行方

一御馬 遠江七郎時基 糟屋左衛門三郎行村

二御馬 式部太郎左衛門尉光政同右衛門次郎

三御馬 出羽九郎宗行 同次郎兵衛尉行藤

四御馬 城六郎顯盛 同九郎長景

五御馬 新相摸三郎時村

式部次郎左衛門尉光長

九日 丁丑晴 被行評定始

十日 戊寅晴 京都飛脚到著申云今月四日園

城寺三摩耶戒壇事被宣下之處同日吉神社三基

祇園三基北野二基京極寺一基已上九基神輿入

洛奉振弁陳頭二基者奉振院御所云

十一日 卯晴 將軍家御衆鶴野

御車

後藤壹岐左衛門尉基頼 加藤左衛門尉景經

城六郎顯盛 筑前四郎左衛門尉行佐

信濃判官次郎左衛門尉行宗

肥後新左衛門尉景長

侍野四郎左衛門尉 伊東次郎左衛門尉盛時

薩摩九郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉頼經

小野寺新左衛門尉行通

一宮次郎左衛門尉康省

鎌田三郎左衛門尉義長

平賀三郎左衛門尉維時

以上帶劔直垂候御車左右

御劔役人 布衣下拵

武藏前司朝直 上布衣

御調度懸 布衣下拵

武藤左衛門尉頼泰 ヨリヤス

御後

五位 布衣

尾張前司時章 アキラ

越後守實時 サチ

遠江前司時直 ナヲ

越前前司時廣 ヒロ

越後右馬助時親

刑部少輔教時

遠江右馬助清時

尾張左近大夫將監公時 キチ

武藏左近大夫將監時仲

民部大夫時隆 タカ

彈正少弼業時

陸奥左近大夫將監義政

小山出羽前司長村

宮内權大夫時秀

木工權頭親家

秋田城介泰盛

參河前司頼氏

和泉前司行方

後藤壹岐前司基政 モト

周防前司忠經

伊賀前司時家

上総前司長泰

甲斐守為時

日向前司祐泰

太宰少貳景頼 ダサウ

六位 布衣下拵

相摸太郎

同四郎宗政

同三郎利時

遠江七郎時基

越後四郎時方

新相摸三郎時村

備前三郎長頼

武藏五郎時忠

式部太郎左衛門尉光政城四郎左衛門尉時盛

遠江十郎左衛門尉頼連

隱岐三郎左衛門尉行景

伊勢次郎左衛門尉行經

筑前三郎左衛門尉行實

薩摩七郎左衛門尉祐能

土屋七郎左衛門尉行頼

和泉三郎左衛門尉行章

善太郎左衛門尉康長

十二日 庚辰 於濱有御的射手之試被撰定其

射手十三人一五度射之

射手

一番

早河次郎太郎

澁谷左衛門太郎

二番

平嶋彌五郎

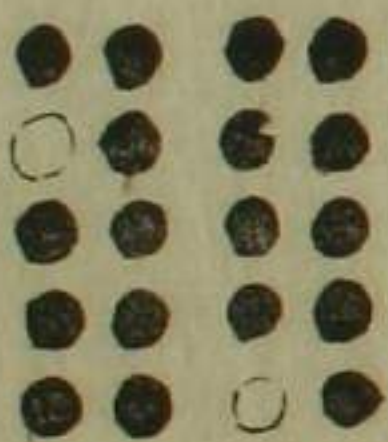
畠本新兵衛太郎

三番

佐貫七郎



八



九



六

藤澤左衛門五郎



六

四番

藤澤左近將監



八

海野矢四郎



八

五番

桑原平内



十

工藤弥三郎



八

六番

本間彌四郎左衛門尉



七

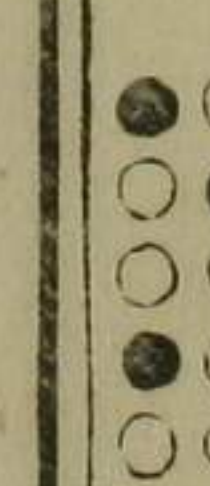
栢間左衛門次郎



九

七番

工藤八郎



三

十四日 度也

壬午晴

寅剋雷鳴今日有御弓始二五

射手十二人

一番

早河次郎太郎祐泰



九



九

澁谷左衛門太郎朝重



七



七

二番

平嶋彌五郎助經



九



八

畠本新兵衛尉重方



四



九

三番

佐貫七郎廣胤



七



七

藤澤左衛門五郎光朝



八

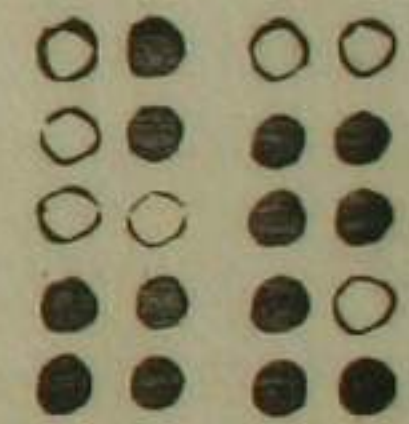


九

四番

藤澤左近將監時親

海野彌四郎助氏



七 六

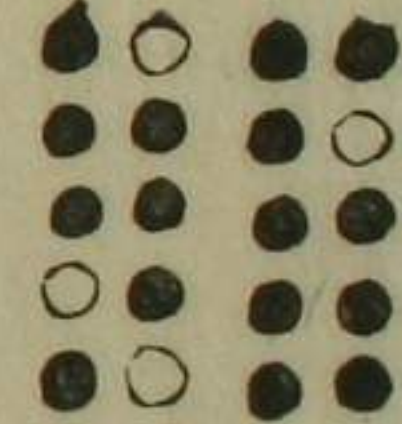


五 六

五番

桑原平内盛時

工藤彌三郎清光



九 七



九 七

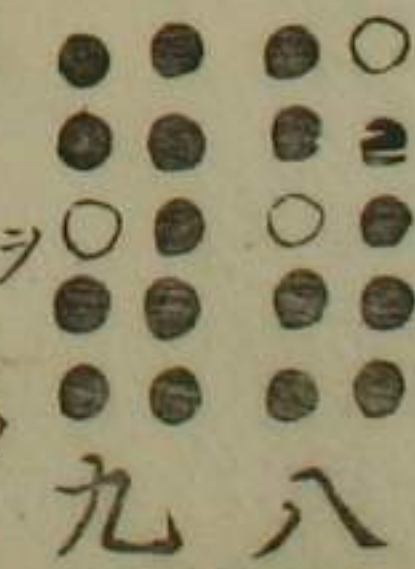
六番

本間彌四郎左衛門尉忠時

栢間左衛門次郎季忠



八 七



八 九

廿日 戊子

今日於御所中

被定早晝番衆其内

於壯士者歌道蹴鞠管絃右筆弓馬郢曲以下都以下

堪一藝之輩於時依可有御要被結番定去比御要

之時無人之間殊以此御沙汰出來仍仰小侍况於
藝能輩目六度之被仰合相州禪門治定云工藤三
郎右衛門尉光泰奉行之城四郎左衛門尉為清書
定

一番午晝番事次第不同

相摸太郎

彈正少弼業時

尾張左近大夫將監公時

民部權大輔時隆

足利上総三郎

秋田城介泰盛

同六郎顯盛

下野四郎左衛門尉景經

遠江十郎左衛門尉頼連

筑前五郎左衛門尉行重

武藤左衛門尉頼泰

信濃五郎左衛門尉行宗

澁谷左衛門太郎朝重

二番未丑

越前之司時廣

遠江右馬助清時

武藏五郎時忠

和泉前司行方

出羽大夫判官行有

和泉三郎左衛門尉行章

淡路又四郎左衛門尉宗泰

式部太郎左衛門尉光政

隱岐三郎左衛門尉行景

大須賀新左衛門尉朝氏

佐貫七郎廣裕

江戸七郎太郎長光

大泉九郎氏廣

三番寅

陸奥左近大夫將監義政

相摸三郎時輔

備前三郎長頼

小山出羽前司長村

上野大夫判官廣經

大隅修理亮又時

城四郎左衛門尉時盛周防五郎左衛門尉忠景

寺嶋小次郎時村

筑前次郎左衛門尉行頼

出羽七郎左衛門尉行頼

一宮次郎左衛門尉康有

本間彌四郎左衛門尉忠時

四番卯

新相摸三郎時村

越後右馬助時親

宮内權大輔時秀

木工權頭親家

日向前司祐泰

城弥四郎長景

大曾禰太郎左衛門尉長經 上野十郎朝村
加藤左衛門尉景經 武石四郎左衛門尉長胤
阿曾沼小次郎光經 波多野小次郎宣經
小野寺新左衛門尉行通

五番 辰戌

刑部少輔教時 遠江七郎時基
新田三河前司頼氏 縫殿頭師連
義作兵衛藏人家教 城五郎左衛門尉重景
河越次郎經重 筑前四郎左衛門尉行佐
甲斐三郎左衛門尉為成 土肥四郎實經
善五郎左衛門尉康家樺野四郎左衛門尉景氏
二宮彌次郎時元

六番 巳亥

越後守實時 同四郎顯時
後藤壹岐前司基故 武藤少卿景頼
上総前司長泰 佐渡五郎左衛門尉基隆
壹岐新左衛門尉基頼伊勢三郎左衛門尉頼經
薩摩七郎左衛門尉祐能肥後新左衛門尉景氏
鎌田次郎兵衛尉行俊 澁谷三郎太郎重村
早河次郎太郎祐泰

正元二年正月日

廿三日 辛酉 可禁遏殺罪輩之由有其沙汰被

定事書云

一 六齋日并二季彼岸殺生事

右魚鱉之類禽獸之彙重命逾山岳身同入倫因茲罪業之甚無過殺生是以佛教之禁戒惟重聖代格式炳焉也然則件日々早禁魚經於江海宜停得獵於山野也自今以後固守此制一切可隨停止若猶背禁遏有違犯輩者至御家人者令注進交名於凡下輩者可加罪科之由可被仰諸國之守護并地頭等但至有限神社之祭者非制禁之限矣

廿六日 壬辰晴 園城寺衆徒使者衆著申云今月四日當寺三摩耶戒壇事被宣下之處同十四日山徒院衆時訴申之同廿日被召返云刺可燒拂寺門之由山僧蜂起繹已爲朝家勝事一寺滅亡

廿九日 乙未 去廿一日神輿歸坐同廿二日三井寺衆徒分散云

二月小

二日 庚子晴 將軍家御方違渡御二棟御所是

可被修理御所之故也今日小侍御簡有新加衆和

泉前司行方傳仰於越州仍令平置左衛門尉工藤

三郎右衛門由沙汰之

二番 伊賀左衛門四郎 同六郎

四番 菱作兵衛藏人

五番 木工權頭

三日 辛丑晴 依山門蜂起園城寺定有火災歟

可警固彼寺之由可相觸大番衆之旨被仰遣六波

羅云

四日 壬寅 出羽判官次郎兵衛尉加小侍御簡

衆

五日 癸卯晴 酉剋故置屋禪定殿下兼經公御

息女御年二十為最明寺禪家御猶子御下著則入御山

內亭是可令備御息所給云云

十日 戊申晴 於最明寺御亭將軍家御吉事有

其沙汰陰陽師晴賢晴茂宣賢文元依召衆入各以

別紙奉日時勘文今月十四日壬子次吉三月廿一

日戊子上吉云云

十四日 壬子晴 將軍家入御最明寺御亭戊剋

姬君御前有御除服之儀天文博士為親朝臣勤御

綾前兵衛佐忠晴朝臣候陪膳木工頭親家為役送
太宰權少貳頼景奉行之

十八日 丙辰晴 將軍家為覽櫻花御出求福寺

廿日 戊午 廂御所結番更被書改行方書之定

廂御所結番事

一番自一日至五日

一條中將 越後守

尾張左近大夫將監 新相摸三郎

武藏八郎 武藤少將

佐渡五郎左衛門尉 出羽三郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉 上総太郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉 一宮次郎左衛門尉

二番 自二十六日
至三十日

阿野少將

武藏左近大夫將監

和泉前司

下野四郎左衛門尉

城五郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

三番 自三十一日
至五月一日

中御門少將

陸奥左近大夫將監

秋田城介

武藤右近將監

治部權大輔

備前三郎

駿河左近大夫

常陸次郎左衛門尉

後藤臺岐左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

宮内權大輔

越前之司

駿河次郎

薩摩七郎左衛門尉

出羽七郎左衛門尉

城彌九郎

四番 自十六日
至廿一日

讚岐守

相摸三郎

後藤臺岐前司

城四郎左衛門尉

武藤左近將監

鎌田次郎左衛門尉

五番 自廿一日
至廿五日

中御門新少將

遠江七郎

伊勢四郎左衛門尉

大曾彌太郎左衛門尉

彈正少弼

武藏五郎

出羽大夫判官

信濃次郎左衛門尉

和泉三郎左衛門尉

狩野四郎左衛門尉

民部權大輔

足利上總三郎

新田參河前司

兵衛判官代

式部太郎左衛門尉

大隅修理亮

筑前三郎左衛門尉

表作兵衛藏久

壹岐三郎左衛門尉

大泉九郎

六番自廿六日一

二條少將

刑部少輔

遠江右馬助

越後四郎

木工權頭

圖書頭

城六郎

周防五郎左衛門尉

加藤左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

上総三郎左衛門尉

土肥四郎

右守結番次第五箇日夜無懈怠可令勤仕之狀所

定如件

正元二年二月日

一日 戊辰天晴 若官別當僧正 隆辨リョウベン 自京都歸

衆是依園城寺三摩耶戒壇事去年九月十四日上

洛今年正月四日就令奏達之勅許而山徒及強訴

之間同廿日被召返官府同廿一日寺門衆徒僧正

仙朝法印淨有忠尊以下僧經三十余輩衆會金堂

疑僉議同廿三日退散云

十四日 辛巳晴 日色赤アカシ將軍家中已御後ヲハラヒ為親

朝臣奉仕之薩摩七郎左衛門尉祐能スケノ為御使

十五日 壬午 日色赤但天陰紅霞厚之故也入

夜朧月殊晴四條院御在位之時石清水行幸日有

此異云

十六日 癸未 為世上無為御祈禱於御所被始

行大般若御讀經云

十八日 乙酉天晴

廿一日 戊子天晴

御輿於東御亭相摸太檜皮寢殿妻戶東御方被察

儲相州武州被候之次自同西門平門出御雜色二

人取松明前行町大路南行入御所東門棟門經東

北庭將軍家於東侍密々御見面土御門中納言花

山院中納言一條少將雅有朝臣彈正少弼葉時木

工權頭親家相摸三即時利越後四即時方前陰陽

少允晴宗朝臣等候其所寄御輿於中御所南渡廊

西向妻戸内東御方一條局同前
島從

相州 雜色二人著直垂者

武藏前司朝直 雜色二人童一人 尾張前司時章

左近大夫將監義政 同已上 相摸太郎殿 雜色二人

人著直垂者五人 相摸四郎 相並

此外

大曾禰太郎左衛門尉長頼

梶原太郎左衛門尉景經

對馬四郎左衛門尉宗經岩間平左衛門尉信重

筑前四郎左衛門尉行佐

鎌田圖書左衛門尉信俊

伊勢次郎左衛門尉行經

信濃次郎左衛門尉行宗

上総三郎左衛門尉義泰 大隅四郎左衛門尉

以上十人著直垂列步御輿左右

此外越後守實時就催促進奉之處依妻室病惱臨
期申障女坊東御方兵衛佐局周防局自閉路被察
進御膳東御方被候陪膳別當局兵衛佐局周防局
為役送吉時將軍家御直衣土御門黃門役御劔相
摸太郎殿献御沓給御傳母履御衾取御沓令退出
給

廿二日 巳丑晴 將軍家入御中御所但依為密儀不及御儲等之沙汰

廿五日 壬辰晴 卯一點地震陰陽道之輩付勘文於和泉前司行方

廿七日 甲午晴 將軍家御吉事有露顯之義相州以下人々布被衆候未尅入御中御處項之

有進物御劔武州砂金銀百兩並相摸太郎殿南庭同相摸四郎又女房一條局分砂金兩秋田城介

泰盛持衆別當局南庭宮内權太輔時秀役之此
外賜風流積於女房之中又被下細櫃二合納

廿八日 乙未晴 和泉前司行方持衆御息所御服月充注文於御所將軍家覽之

正月分

御小褂二階織物 御表著二階織物 重御衣上十綾

御單一階織物 紅御袴 三御小袖 三御衣

二御衣 二御小袖二具 薄御衣 白御衣

御裳 色々御小袖五具 御夜衣 御明衣

今木二具 御櫛一束 御櫛拂 御拂

御疊紙 御眉墨 御眉造 御赭

御白粉 御護

二月

二御衣 二御小袖色々御小袖五 御裳

三月 同二月

四月

御褂二階織物 合御衣五唐織物 綾練

更衣御單合御衣 合二御小袖 合御小袖三

紅御袴 御裳三

五月

御小褂二階織物 御單 御捻重五重唐織物

上二階織物九 御小袖單重 紅御袴 二生御衣

合御小袖二 御帷五 御裳三 生御夜衣

七月

御小褂二階織物 御單重二階織物九 御小

袖單重 紅御袴 生御衣 御帷七 御裳三

御明衣二 今木二具

九月

御小褂生二階織物 生七御衣上二階織物九 御

學生^ニ御小袖^入御襪^一

紅御袴 二生御衣

御小袖五^ツ 御裳三

以上七箇月可為與州禪門御沙汰

六月

御單重 生御小袖 白御袴 生御衣

御帷七^ツ 御裳二^ツ

八月

二生御衣 御單 生御小袖 白御袴 生御衣

衣 合御小袖三^ツ 御帷二^ツ 御裳二

衣 御朋

十月

御小褂^{ワキキ} 三階織物 八御衣^{上二階} 御單二^ツ

御小袖 紅御袴 三御衣 薄御衣 二御

小袖 紅宿衣 色々御小袖五^ツ 御裳二

十一月

二御衣 二御小袖 色々御小袖五 御裳三

十二月^同十一月

以上五箇月相州禪門御沙汰也

四月大

一日 戊戌 將軍家御吉事已後依可有入御于

入道陸奥守亭供奉人事有其沙汰如例召惣人數
記被下御點^{テシラ}雖被載^{トノセ}其記今度漏^{モト}御點^{トノセ}入々

遠左右馬助 越後右馬助

駿河四郎 同五郎

武藏五郎

那波刑部少輔

周防守

伊賀前司

長井判官代

壹岐新左衛門尉

筑前三郎

和泉六郎左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

式部次郎左衛門尉

伊賀式部八郎左衛門尉

伊東次郎左衛門尉

同八郎

上総介

梶原上野前司

甲斐守

城弥九郎

大隅修理亮

同四郎

同七郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

武藤左邊將監

小野寺新左衛門尉

土肥四郎

肥後新左衛門尉

同十郎左衛門尉

後藤次郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉

符野五郎左衛門尉

筑前三郎左衛門尉

式部太郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

薩摩九郎左衛門尉

大泉九郎

相馬五郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

同四郎左衛門尉

元自故障有レ事

服服日數相殘之由申下
有沙汰可憐之由被仰出
雖無沙汰為式部大郎左
衛門尉替可供奉之由追
被仰下

追加

信濃前司

駿河次郎

駿河左邊太夫

二日 己亥 御出事明白也而式部太郎左衛門尉外舅於若狹國他界事違期之後達遠聞之間數日數禁忌之殘日不幾之處有此御出事仍始者雖被仰可有憚之間今日有沙汰被問鶴足別當申不可憚由之間可被召具者次以鎌田三郎左衛門尉可為光政替之由雖被仰本人出仕之上不及子細

三日 庚子晴 入御于入道陸奥守亭御息所御

同車供奉布衣
土御門中納言 顯方卿
二條三位 教定卿
前兵衛佐忠時朝臣
花山院中納言 長雅卿
中御門少將宗世朝臣
二條少將雅有朝臣

武藏前司朝直 俊御 劔
越後守實時
越前之司時廣
左近大夫將監公時
新相摸三郎時村
越後四郎顯時
和泉前司行方
宮内權太輔時秀
出羽前司長村
木工權頭親家
太宰少貳景賴
對馬前司氏信
遠江前司時直
刑部少輔教時
彈正少弼業時
左近大夫將監時連
相摸三郎時利
遠江七郎時遠
秋田城介泰盛
中務權少輔守教
壹岐前司基政
參河前司頼氏
縫殿頭師連
日向前司祐泰

武藤左衛門尉頼泰 下野四郎左衛門尉景經

式部太郎左衛門尉光政

常陸次郎左衛門尉行清

出羽七郎左衛門尉行頼

信濃次郎左衛門尉時清

周防五郎左衛門尉忠景

上野三郎左衛門尉義長

遠江十郎左衛門尉頼連

伊勢次郎左衛門尉行經

大曾彌太郎左衛門尉祐能加藤左衛門尉景經

薩摩七郎左衛門尉長頼

小野寺四郎左衛門尉道清

鎌田次郎左衛門尉行俊

相州 武州 前尾州

相摸太郎殿同四郎等

豫被象候御所兼被在御衣

加等於出居輕御衣一具御衣指貫小袖十具七御

衣一具 御小褂紅御袴御小袖十具懸之

御盃酒之後奉御引出物御劔尾張前司時章砂金

越後守實時南庭秋田城介泰盛

一御馬 新相摸三郎時村

二御馬 武藏五郎時忠

三御馬 相摸太郎殿

波多野出雲次郎左衛門尉

式部太郎左衛門尉 淺羽左衛門次郎

雖載供奉散狀稱有所役不候路次

御息所御方進風流造女房中絹百疋公卿劍

殿上人馬五六位查行騰也

六月 壬寅晴 自去年冬之比時行流布之間可

被祈請之由被仰于諸寺云

十七日 甲寅晴 六波羅飛脚參著申云去十二

日丑尅院御所燒失云又山徒以血奉塗神輿之由

同所注進也

十八日 乙卯晴 小臺所恪勤侍五人可令著到

之由云工藤三郎左衛門尉光泰平左衛門尉實

俊等奉行之和泉前司行方武藤少卿景頼依傳仰

也

恪勤

村田藤五太郎

村田弥五郎

入野平太

同藤四郎

龜谷源次郎

今日改元詔書到來去十三日改正元二年為文應

元年文章博士在章撰進云依御即位也

十九日 丙辰陰 為武藤少卿景頼奉行可被始

行御祈禱之由有其沙汰之處八尊有憚之由陰陽

道依勘申被閣之云

廿二日 己未晴 於政所被行改元吉書亦御祈

禱事陰陽道雖申子細殊被急思食重被經評定今

日始行松殿法印左大臣法印等奉仕之今日將軍

家御惱之間及戊刻於御所南庭被修千手法次始

行不斷千手タシ隨羅尼ニシ若宮別當僧正ニシ辨率ヒキテ八口伴僧ハシ奉仕之ヲ

廿四日 辛酉 御惱事ナド令復本御セタフキニメスト聞食御膳シラ云

廿六日 癸亥 將軍家御惱事去夜女房尼左衛門カミヲツネ督局有夢想一人僧告申云依嚴重御病不可入ヤヒ

幕中ニ云仍今朝彼局語申夢中之間被尋チ右京權大夫茂範朝臣之處將軍御居所者稱幕府法驗炳焉ヒイヒシタ之由申之ヲ

廿九日 丙寅 丑尅ウツ鎌倉中大燒亡セウウツ自長樂寺前

至龜谷人屋ツクニ云

廿日 丁卯天晴 今日評議負物事フヒモノ輒不及沙汰タセテ之趣雖被定置メフカキ庭弱之輩トモカラナケキ歎申之旨依被聞食及如レ

先々可有其沙汰ニ云次訴訟事シツ不叙用ナシ三箇度者可有キ注進所帶之旨ツクニ可成下御教書シラ云

五月小

四日 辛未 故武州禪門御成敗事不及改沙汰セ之間被載式目畢而同時重可有沙汰之由有所見之輩者不拘此文可有其沙汰仁治三年以後給御教書遂問答之疑者非沙汰之限今日被定之ヲ

十日 丁丑晴 秋田城介入道覺智第三年追福松下禪尼為施主被修之願文章右京權大夫茂範朝臣清書本曼荼羅供大阿闍梨日光別當法印尊家

十三日 庚辰晴 子尅將軍家御惱ナド

十六日 癸未 雨降御惱御祈被行鬼氣并御夢祭等。

十八日 乙酉 雨降將軍家御惱令複本御。

六月大

一日 丁酉 疾風暴雨洪水河邊入屋大底流失。

山崩人多為被殺者被獸死。

四日 庚子 就檢斷事今日有被定之條且被仰

遣六波羅也所謂

一 國々守護人召進犯科人事

右召進關東無謂任被定置之旨可被沙汰之由

可令相觸守護人但寄事於左右守護人致非據

沙汰之由訴申之時者可令尋成敗矣

一 可召關東犯科人事

右於訴重科張本者任先例可召進之至輕罪者

於六波羅可有尋沙汰矣

一 放免事

右於殺害人者日來十箇年以後隨所犯輕重雖

被免之於今度者諸國飢饉之人民病死過法之

間以別御計不謂年記無殊子細之輩者至當年

所犯者被放免畢焉

五日 辛丑 雨降被行止雨御祈安祥寺僧正良

瑜修一字金輪法今日被勒放生會供奉人散狀云

七日 癸卯 雨降未尅屬晴自去月十六日霖雨

不休今日適迎晴是偏法驗之所致歟

十二日 戊申 為人處疾疫對治可致祈禱之由
今日被仰諸國守護人云其御教書云

諸國寺社大般若經轉讀事

為國土安穩疾病對治於諸國寺社可被轉讀大
般若經取勝仁王經等也早仰其國寺社之住僧
致精誠可轉讀之由可令相觸地頭等也只於地
行所者同可令下知之狀依仰執達如件

文應元年六月十二日

武藏守
相摸守

某殿

十六日 壬子 放生會御寮官供奉人物惣記自小
侍被獻武州是可令計沙汰給之由也而任例被仰

可進覽御所之旨返遣之

十八日 甲寅 被付供奉人記於和泉前司行方

而有被仰出條之所謂云

可有御息所御寮官事

相摸太郎 元者 可為隨兵云云

可為彼御方御共者

武藏前司

為供奉人數雖有御合點可象候迴廊者

佐々木壹岐前司

雖有御點今度不可催者

小山出羽次郎

雖無御點可催加隨兵者

十九日 乙卯晴 於濱鳥居邊天文博士為親朝
臣奉仕風伯祭御使安藝右近大夫重親今度依御
氣色被用舊祭文云

廿二日 戊午 相摸四郎可著布衣同三郎如元
可為隨兵之由云

廿五日 辛酉晴 西對京都飛脚參著自去十五
日一院令煩瘧御之由申之

廿六日 壬戌晴 為和泉前司行方奉行以來問
院御惱事被行御占今自廿六日七日御減

之由勘申之其後薩摩七郎左衛門尉祐能為使節
上洛依院御惱也

廿日 丙寅晴 木土權頭親家為使上洛猶被申

御惱事之故也

七月小

二日 戊辰晴 京都飛脚到來院御不豫御減之
由申之御驗者左大臣法印近衛右府御息云

四日 庚午晴 入夜雷雨今日三浦式部太郎左
衛門尉光政為使節上洛御惱御減事依被賀申也

六日 壬申為和泉前司行方奉行有被尋問于越
後守實時相摸太郎主等事是去年被相催隨兵之

時大須賀新左衛門尉朝氏阿曾沼小次郎光經各
自由不察而愁以光經者著進子息五郎朝氏者立

弟五郎左衛門尉信泰於代官此事許容誰人計哉
者實時朝臣等申云以詞令申者傳者若無委細披

露敷退載狀。可令言上者。則勲狀付工藤三郎右衛門尉光泰。先披覽于相州禪室之處。被計仰云。載狀之條。頗以似嚴重歟。只以光泰實後等之詞。屬行方謝申之條。可宜歟者。彼狀云。

去年八月。放生會御社參供奉人。問被仰下兩條。

一 阿曾沼小次郎。隨兵役以子息。令勤仕申事。

右所勞之由。押紙于迴文之間。言上子細之處。以光

泰實後。度之有御尋子細。可令勤仕之由。被仰下訖。

更非自由之計候。

一 大須賀新左衛門尉同五郎左衛門尉等間事。

右於大須賀新左衛門尉者。被下隨兵御點歟。間催

促候之處。所勞之由。押紙于迴文之間。注申此旨候。

之。現所勞之間。御免訖。次於五郎左衛門尉者。本自被下直垂御點候之間。勤仕訖。此兩人事。同非私計候。以前兩條如此之由。覺語候。但胸臆申狀。不定御信用候歟。然而如此事。先之不及御書下候之間。或引勘愚記。或任御點。注文言上子細。以此趣。可令披露給候。恐惶謹言。

七月六日

平時宗
越後守實時

進上 和泉前司殿

七日 癸酉 朝氏光經等間事。行方聞光泰實後

口狀披露云。無殊事歟。越州等書狀。隨禪室嚴命。留

中申云。

八日 甲戌 放生會供奉直垂著事為有御點撰
可然之輩可注進之旨去月十六日被仰下之間小
侍所令清撰之一昨日進覽之間今日有御點為令
催促被返之云

十日 丙子 鎌倉中僧訶可鎮狼藉之旨被下御

教書云

廿三日 己丑 小侍番帳更清書之雖被仰中山

城前司盛時依申所勞之由佐藤民部大夫行斡又

奉仰所濼筆也是以和泉三郎左衛門尉行章被下

願御箱於小侍所願與小侍每其番自一六番不參差

為同日之樣令結番之可書改之由依被仰下如此

云且清書仁以前兩人可然之旨為相州禪室御訶

云云

廿四日 庚寅晴 京都飛脚參著去十五日以役

院御瘡御更發之由申之

廿五日 辛卯晴 依御惱事信濃次郎左衛門尉

行宗為使節上洛今日薩摩七郎左衛門尉自京都

歸參又小侍番帳事有其沙汰於書樣雖為次第不

同之儀何無所思哉聊立次第可書改之由被仰下

云和泉前司行方武藤少卿景頼等為奉行也是日

來結番之體不云官位不論嫡庶且依宿老且隨勤

否被書云

廿六日 壬辰陰 京都飛脚又到來去廿一日

門院御婦將崩御之由申之

廿九日 乙未晴 中御所番衆者可著到于廂御所之旨。和泉前司行方奉行。相觸工藤三郎右衛門尉光泰平里左衛門尉實俊云。午刻京都飛脚到著院御瘡病去。廿一日。平復御驗者道性僧正云。今日御息所入御相州禪室御亭。供奉人

越前々司

刑部少輔教時

尾張左近大夫將監公時

新相摸三郎時村

相摸三郎時輔

陸奥左近大夫將監義政

壹岐前司基政

和泉前司行方

出羽大夫判官行方

式部太郎左衛門尉光政

城四郎左衛門尉頼泰

大曾彌子太郎左衛門尉長頼
武藤左衛門尉時盛 上総子太郎左衛門尉長經
和泉三郎左衛門尉行章
常陸次郎左衛門尉行清
八月大

二日 丁酉晴 式部太郎左衛門尉自京都歸衆

五日 庚子晴 申尅甚雨大風人屋多以破損成

六日 辛丑 相摸三郎外祖父率之間輕服

七日 壬寅晴 將軍家煩赤痢病御仍為相摸本
郎殿沙汰被行如法泰山府君祭為親朝臣奉仕之

御使狩野四郎左衛門尉

八日 癸卯晴 依御惱以七日碩德被修七座法

安祥寺僧正松殿法印勝長壽院法印左大臣法印

已下也

十二日 丁未晴 依御惱事為相摸太郎殿御沙

汰一日中被造立藥師像將軍家御尊身供養導師尊家法

印又被始行藥師法今日有被仰遣于六波羅事其

御教書云

問註以後追進狀事不進證文之外於誰陳者不
及沙汰之由被定畢而進覽問註託具書之時
每度被制進追狀之條違傍例非無沙汰之煩於
自今以後者證文之外不可副進新陳之狀若令

備進簡要證文者遂覆問可令副進彼證文之狀
依仰執達如件

文應元年八月十二日

武藏守 相摸守

陸奥左近大夫將監殿

十五日 庚戌晴 鸛置放生會將軍家無御參宮

赤痢病御惱不輕之故也武州為御使被神拜舍第

左近大夫將監義政并相摸四郎和泉前司行方太

宰權少貳景頼壹岐前司基政縫殿頭師連上総前

司長泰等衆廻廊

十六日 辛亥陰 武州參宮同昨將軍家雖無御

出馬場之儀棧敷等如例大夫判官行有大夫判官

廣經大夫判官行氏等警固馬場

十七日 壬子晴 依將軍家御惱於御鞠壺天文

博士為親朝臣勒如法泰山府君祭鞍置馬一疋鎧

弓箭等為相摸大郎殿御沙汰被奉之御雙紙箱錦

袋自御所被出之

廿日 乙卯晴 將軍家御惱聊令屬臧御

廿五日 庚申 依可有二所御參詣供奉人等有

其沙汰且書於先日御點人數可令進之由被仲小

侍所行方傳達之云宗像六郎子息童形意九點御

調度懸可供奉之由被定云

廿六日 辛酉 雨降將軍家御除服為親朝臣

勤御被陪膳讚岐前司忠時朝臣布衣役送近江前

司季實

九月小

五日 庚午晴 辰尅將軍家御沐浴御驗者醫陰

之輩等豫祿於鞠御壺有其儀權侍醫長世前隕陽

大允晴茂朝臣各賜御衣一領御劔一腰坊門三位

直基卿取御衣給兩人薩摩七郎左衛門尉祐能引

御馬置鞍亦被召彼兩人於中御所給御衣次召為

親朝臣以女房別當局給銀劔一腰松殿法印良基

依無用意早出之間被送遣御衣御劔御馬一疋

於件宿坊和泉前司行方為御使又於御所被修北

斗法七箇日若宮別當僧正奉仕之

十月小

八日 壬寅 小早河股三郎被召加小侍番帳武
藤少卿景賴傳仰云

十五日 己酉 相州政村 息女煩邪氣今夕殊惱

亂為此企判官女譖岐局靈崇之由及自詫云件局

為大蛇頂有大角如火炎常受苦當時在比企谷土

中之由發言聞之人豎身毛云

廿二日 丙辰晴 貢馬御覽相州武州已下出仕

如例

十一月大

八日 辛未 深栖兵庫助孫平嶋藏人太郎重頼

入小侍番帳和泉前司行方奉仰觸小侍云

十日 癸酉 明年御的始射手事被差定之相模

太郎殿越後守等被下奉書

十一月 甲戌 二所御參詣事來十九日可被始

之仍供奉人間事可被催促之趣和泉前司行方奉

仰觸申越州并相摸太郎殿而卿相雲客事者就為

御所奉行沙汰任例可令行方催促之處加于小侍

奉行事申可被催由之條聊宿德令也已昔兩人所

存之間忽被返遣彼公卿等散狀於行方云其狀云

二所御參詣供奉人間事仰給之趣不得其意候

之間所給之註文等返進候恐々謹言

十一月十二日

和泉前司殿御返事

十六日 己卯晴 亥尅雷鳴數聲

時宗

實時

十八日 辛巳 二所御衆詣精進事明日者延引
可爲廿一日之由給定仍武州被觸神其趣於小侍
所周東兵衛五郎爲御使又來廿一日御息所爲御
見物始御濱出之體密々可令出于小山出羽前司
若宮大路家御除二所供奉人可差進仰宜供奉人
由武州同令下知給云

十九日 壬午 來廿一日爲令浴精進潮御濱出
事御所中御精進御息所明日可出他所給事兩條
有其沙汰供奉人各可爲直垂折烏帽子之由被相
觸且所被下御教書也今夕二所御衆詣之間步行
供奉人等事於御前有御沙汰新右衛門督花山院
中納言後藤壹岐前司武藤少卿等候其砌云

廿日 癸未 御物詣供奉之間領狀輦之中一兩
輦有中障事所謂

後藤次郎左衛門尉 只今輕服事出來之由申
上總三郎左衛門尉 俄所勞之由申

廿一日 甲申 將軍家依可令始二所御精進御
中御所入御陸奥入道亭供奉人。

- 相摸太郎 同四郎重政
- 同三郎時利 同七郎宗頼
- 越前々司時廣 尾張左近大夫將監公時
- 遠江右馬助清時 陸奥左近大夫將監義政
- 彈正少弼業時 越後四郎時方
- 木工權頭親家 壹岐前司基政

上総前司長泰

武藤少卿景頼

出羽大夫判官行有

式部太郎左衛門尉光政

城四郎影盛

和泉三郎左衛門尉行章

周防五郎左衛門尉忠景

武藤左衛門尉頼泰

信濃次郎左衛門尉時清

大曾禰太郎左衛門尉長頼

薩摩七郎左衛門尉祐能

廿二日 乙酉晴 將軍家被始二所衆詣御精進

仍為令浴潮有御出由比浦之間為御見物中御所

入御于小山出羽前司長村若官大路之家

御輿

三浦六郎左衛門尉頼盛

遠江十郎左衛門尉頼連

佐々木對馬太郎左衛門尉頼氏各列歩御

新相摸三郎時村 遠江七郎時基以上御輿

宮内權大輔時秀 秋田城介泰盛

對馬前司氏信 加賀守行頼

丹後守頼景 城四郎左衛門尉時盛

同弥九郎長景

申尅御出御手水供奉ケイシヤウシ相雲客皆著水干ヲ其外

武州相摸太郎殿以下者直垂還御之時者公私淨

衣云

廿四日 丁亥天晴 將軍家中潮御濱出

廿六月 己丑晴 玄番頭舟波長母去十五日叙

位四位上仍今日持桑彼除書出於御所是去八月
將軍家御惱施醫療之賞也其由有

廿七日 庚寅晴 卯剋將軍家御桑鶴里宮辰尅

二所御進發

供奉人不設立

先陳隨兵十騎

次御引馬

次御弓袋差

次御甲著

次御胃持

次御小具足持

次御調度懸

次御先達

伊豫法眼教導

次御駕

後藤壹岐左衛門尉基頼

薩摩七郎左衛門尉祐能

同十郎左衛門尉 周防五郎左衛門尉忠景

上総太郎左衛門尉長經

甲斐五郎左衛門尉為定

大須賀五郎左衛門尉信泰

武石新左衛門尉長智

隱岐三郎左衛門尉行氏 同四郎左衛門尉行廣

伊東次郎左衛門尉盛時

佐渡左衛門太郎基秀

鎌田三郎左衛門尉義長

平賀四郎左衛門尉泰實

葛西又太郎定廣

鎌田次郎左衛門尉行俊

大泉九郎長氏

次御_二役人 已上步行鹿馬左右

太宰少貳景賴

次御_二後

新右衛門督顯方

讚岐守忠時朝臣

二條少將雅有朝臣

菟原右衛門尉定仲

小河左衛門尉時仲

平畠左衛門尉實俊

花山院中納言長雅

中御門新少將實隆朝臣

彈正少弼葉時

尾張左近大夫將監公時

越後四郎時方

壹岐前司基政

刑部權少輔政茂

周防前司忠經

出羽大夫判官行方

甲斐守為成

陸奥左近大夫將監義政

越前之司時廣

相摸四郎宗政

武藏五郎時忠

木工權頭親家

伊賀前司時家

上総前司長泰

隱岐大夫判官行氏

千葉介頼胤

圖書頭忠茂朝臣

玄番頭長世朝臣

安藝右近大夫親經

權天文博士為親朝臣

能登右近藏入仲家

上野三郎國家

阿曾沼小次郎光經

大須賀新左衛門尉朝氏

鎌田圖書左衛門尉信俊

進三郎左衛門尉宗長

後陳隨兵十騎

今日相州

政村

被頓寫

一日經是息女惱邪氣依比

企判官能負女子靈託為資彼苦患也入夜有供養

之儀請若官別當僧正為唱導說法寂中件姬君惱

亂出舌舐脣動身延足偏似蛇身之令出現為聽聞

靈氣來臨之由云僧正令加持之後惘然而止言如

眠而復本云

北八日 辛卯晴

御奉幣管根御山衆徒等湖上

浮船延年垂髮翻迴雪之袖盡歌舞之曲

廿九日 壬辰陰 夜半令詣三嶋社御之奉幣曉

天云

卅日 癸巳 雨降御藜伊豆山

十二月小

一日 甲午 雨降已赴御奉幣伊豆山則御下向

御夜宿土肥卿當所御所馱餉等極羨盡善甚雨源

佐之間為御休息御逗留土肥卿

二日 乙未陰 御止宿酒勾驛相摸國御家人群

衆此所

三日 甲辰晴 將軍家還御于鎌倉御所御奉幣

無為

十六日 己酉 明年正月御弓始射事等事被差

定之處稱所勞申障之輩相交之間今日於小侍所

相摸太郎殿越後守等經談合自由對捍不可然內

調之時企案上可申子細之旨被下御教書云又武

州長時頓病辛苦云

十七日 庚戌 梶原上野六郎被加小侍番帳武

藤少卿景賴傳仰於小侍所云

十八日 辛亥晴 依將軍家御願被供養八萬四

千墓塔導師專家法印

廿日 癸丑陰 酉刻御所東侍陀羅尼衆休所為

飛入御慎之由陰陽道等勘申之

廿一日 甲寅晴 入道右大辨光俊朝臣法名真親光親

卿自京都下著當世歌仙也

廿三日 丙辰 小雨降右大辨禪門始出仕和歌

與行盛也

廿四日 丁巳 寅尅武州病患屬減氣汗大降云

廿五日 戊午 京上所役事有其沙汰今日被定

法云

一京上役事付大番役

諸國御家人恣之錢貨之夫馱該巨多用途於貧

民等致呵法謹責於諸庄之間百姓等及侘際不

安堵由遍有其聞然則於大番役者自今以後改

別錢參百文此上五町別官賦一疋入夫二人可

該權之於此外者一向可令停止也令定下負數

以後於日來沙汰所之者就此負數不可加增也
一地頭補任所々内御家人大番役事

先々御家人役勤仕之輩者可為守護催促也

又將軍家明日依可有御方違供奉人事如例以御

點被催之武藏前司尾張前司越後守等者兼可候

催儲御所之旨被觸御訖武州者日來勞越州者心

神聊有違亂之事旨言上云

廿六日 巳未晴 依去廿日為恠被行百怪祭今

夜將軍家御方違于相摸太郎殿御亭中御所

御同車 八葉

供奉人

刑部少輔教時

遠江右馬助清時

彈正少弼業時

同七郎宗頼

越後四郎時方

宮内權大輔時秀

壹岐前司基政

和泉前司信方

武藤少卿景頼

隱岐大夫判官行宗

城六郎顯盛

薩摩七郎左衛門尉祐能

周防五郎左衛門尉忠景

以上立烏帽子直垂

相摸二郎時輔

新相摸三郎時村

武藏五郎時忠

秋田城介泰盛

木工權頭親家

上総前司長泰

出羽大夫判官行有

式部太郎左衛門尉光政

信濃次郎左衛門尉時清

加藤左衛門尉景經

廿七日 庚申晴 松殿法印良基去 八月將軍家
御憐之時御祈賞今月十六日任權僧正聞書今日
到來者賞則參賀御所土御門中納言為申次
廿九日 壬戌 明春正月朔可有御行始供奉人
事可相催之由武藤少卿傳仰於小待所而為堦飯
出仕人々於御所庭上兼取座藉所差並札也仍光
泰實俊行向其所就札所見註交名進上申下御點
相觸其旨云

新刊吾妻鏡卷第四十九

新刊吾妻鏡卷第五十

文應二年辛酉 二月廿一日為弘長元年

正月六

一日 癸亥霽 堦飯相州禪室 兩國司以下著布
衣出仕先候東西侍次申出御時尅之後相分于庭
上東西著座
西座

- 武藏前司
- 遠江前司
- 刑部少輔
- 秋田城介
- 和泉前司
- 尾張前司
- 越後守
- 治部權大輔
- 佐々木壹岐前司
- 那波刑部少輔

縫殿頭

後藤臺岐前司

伊賀前司

周防前司

武藤少卿

甲斐守

太田新民部大夫

式部太郎左衛門尉

長左衛門尉

加地七郎右衛門尉

常陸次郎左衛門尉

陸摩七郎左衛門尉

宮内權大輔

對馬前司

日向前司

上総前司

加賀前司

上野介

伊豆太郎左衛門尉

佐藤民部大夫

善五郎左衛門尉

長内左衛門尉

城四郎左衛門尉

武藤右近將監

筑前三郎左衛門尉

城五郎左衛門尉

城六郎

城彌九郎

上野太郎左衛門尉

伊勢三郎左衛門尉

壹岐三郎左衛門尉

武藤次郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉

大曾彌太郎左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

出羽七郎左衛門尉

善六郎左衛門尉

和泉三郎左衛門尉

城十郎

越中次郎左衛門尉

遠江十郎左衛門尉

土肥四郎左衛門尉

上野三郎左衛門尉

後藤次郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

肥後三郎右衛門尉

小野寺新左衛門尉

上総三郎右衛門尉

式部左衛門三郎

上総四郎

山田彦次郎

上野六郎

甲斐三郎左衛門尉

東座

越後右馬助

陸奥左近大夫將監

彈正少弼

武藏左近大夫將監

相摸三郎

式部次郎左衛門尉

備後太郎

武右新左衛門尉

矢部平次馬次郎

善六郎左衛門次郎

隱岐四郎兵衛尉

越前之司

尾張左近大夫將監

新相摸三郎

民部權太輔

同七郎

遠江右馬助

駿河四郎

駿河五郎

遠江修理亮三郎

武藏八郎

少輔左近大夫

新田參河前司

直講

下総前司

周防修理亮

安藝右近大夫

少輔次郎

遠江七郎

越後四郎

武藏五郎

越後又太郎

同九郎

木工權頭

助教

大藏少輔

中務權少輔

義濃兵衛大夫

長井判官代

那波次郎

安藝掃部助

能登右近藏人

近江藏人

皆吉大炊助

大隅大炊助

大隅藏人

備後藥師九

紀伊次郎左衛門尉

伊賀左衛門次郎

周防三郎左衛門尉

豐後三郎左衛門尉

大見肥後四郎左衛門尉
伊藤次郎左衛門尉

姜祚左近大夫

兵衛藏人

大隅修理亮

赤塚藏人

宗民部大夫

進三郎左衛門尉

大多和左衛門尉

河越小次郎

太田四郎左衛門尉

加治六郎左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

天野肥後新左衛門尉

阿部左衛門尉

大多和左衛門尉

鎌田次郎兵衛尉

三村左衛門尉

薩摩十郎左衛門尉

大學允

周防六郎左衛門尉

香西又太郎

平賀四郎右衛門尉

恠河四郎左衛門尉

長雅樂左衛門三郎

平賀三郎左衛門尉

野部五郎左衛門尉

萩原右衛門尉

隱岐四郎左衛門尉

長右衛門尉

清六郎兵衛尉

小河左衛門尉

足立三郎右衛門尉

阿佐義左近將監

源太左衛門尉

狩野八郎左衛門尉

小泉四郎左衛門尉

藤田次郎左衛門尉

清三郎左衛門尉

對馬左衛門次郎

伊賀六郎左衛門次郎

大須賀新左衛門尉

式部八郎左衛門三郎

大泉九郎

大見肥後左衛門次郎

縮毛左近將監

河勾左衛門四郎

狩野左衛門四郎

布施宮内左衛門大郎

狩野左衛門六郎

將軍家出御南面土御門中納言上御簾御引出物

如恒

御叙武藏前司朝直

御調度

越後守

實時

御行騰

秋田城介泰盛

一御馬

新相摸三郎時村

栗飯原右衛門尉

二御馬

相摸三郎時輔

諏方四郎兵衛尉

三御馬

越後四郎顯時

安東宮内左衛門尉

四御馬

城四郎左衛門尉時盛

同五郎左衛門尉重景

五御馬

遠江七郎時基

大倉次郎左衛門尉

未尅將軍家御行始相摸禪室亭

御所御方

武藏前司朝直

刑部少輔敦時

彈正少弼業時

尾張左近大夫將監公時

遠江右馬助清時

新相摸三郎時村

越後四郎顯時

相摸七郎宗頼

秋田城介泰盛

同六郎顯盛

和泉前司行方

同三郎左衛門尉行章

中務權少輔重敦

木工權頭親家

新田參河前司頼氏

佐々木壹岐前司泰經

後藤壹岐前司基政

伊賀前司時家

日向前司祐泰

常陸次郎左衛門尉行清

周防五郎左衛門尉忠景

武藤左衛門尉頼泰

薩摩七郎左衛門尉祐能

信濃次郎左衛門尉時清

小野寺新左衛門尉行通

加藤左衛門尉景經

武石新左衛門尉長胤

上総太郎左衛門尉長經

上総太郎左衛門尉長經

隱岐四郎兵衛尉行廉

甲斐三郎左衛門尉為成

鎌田次郎左衛門尉行俊

中御所御方

遠江前司時直

治部權大輔頼氏

陸奥左近大夫將監義政

民部權大輔時澄

相摸三郎時輔

遠江七郎時基

武藏五郎時忠

宮内權大輔時秀

武藤少卿景頼

對馬前司氏信

周防前司忠經

式部太郎左衛門尉光政

城四郎左衛門尉時盛

同五郎左衛門尉重景

筑前三郎左衛門尉行實

出羽七郎左衛門尉行頼

出羽七郎左衛門尉行頼

土肥四郎左衛門尉實經

武藤右近將監時村 上総三郎右衛門尉義泰

大曾彌太郎左衛門尉長頼

鎌田三郎左衛門尉義長

御引出物役人御劔 治部權大輔頼氏

砂金 左近大夫將監義政

羽 左近大夫將監公時

一御馬 武藏五郎時忠

大瀬三郎左衛門尉惟忠

二御馬 常陸左衛門尉行清

和泉三郎左衛門尉行章

三御馬 薩摩七郎左衛門尉祐能

還御之後御息所御行初同亭

二日 甲子天晴 垸飯奥州禪門 土御門中納言

上御簾 御劔刑部少輔教時

御調度 左近大夫將監公時

御行騰 大宰權少貳景頼

一御馬 相摸三郎時輔

二御馬 工藤三郎右衛門尉光泰

三御馬 武藏五郎時忠 對馬次郎兵衛尉本

四御馬 梶原大郎左衛門尉景經 同五郎景方

周防五郎左衛門尉忠景 同六郎左衛門尉忠頼

五御馬 出雲次郎左衛門尉時光 同六郎義泰

三日 乙丑陰 堽飯相州御沙汰 御簾役

黃門候之クワラモシ 御劔コウケン 越後守實時サチ 御調度シヨウドウ

左近大夫將監公時 御行騰シカバキム 和泉前司行方

一御馬 遠江七郎時基モト

式部次郎左衛門尉光長

二御馬 越後四郎顯時 糟屋左衛門三郎行村

三御馬 出羽七郎左衛門尉行賴

同八郎左衛門尉行世

四御馬 城六郎顯盛アキモリ 同九郎長景

五御馬 新相摸三郎時村

伊賀右衛門三郎朝房トモフサ

來七日可有御燦于鶴屋八幡宮供奉惣人數任例
可令注申之旨被仰下行方為奉行

四日 丙寅 七日供奉事以御點人數召進奉而

最明寺殿公達御事有可被載于如散狀之次第所

謂相摸太郎同四郎同三郎同七郎如此是禪室內

々所思食也當時書樣頗違御意云工藤三郎右衛

門尉光泰得其趣告事由於越州云越州報云於今

度散狀者人々既進奉訖此上今更不能書改歟直

承存之後可改向後體之由云此事不限今日去年

則安東左衛門尉光成告申旨如此云太非越州所

存歟武藤少卿一同之間去年冬之比於禪室御前

聊依暇申寔鼻云凡太郎殿可被著兄之上由被仰

之

五日 丁卯天晴 將軍家御祈禱如和泉前司行

方奉行之又來九日可有御鞠始之由云而懸一本

枯間為被仰下可注進交名之旨行方傳仰於平且

左衛門尉實俊仍注進之其中被下御點訖

刑部少輔

越前々司

遠江守

武藏五郎

秋田城介

出羽大夫判官

仰此人々來九日可有御鞠始懸一本期自以前可

尋進之由被仰下之趣被書下之越州奉云云

六日 戊辰霽 子丑兩尅雷鳴三度今自以大多

和左衛門尉可加明日布衣供奉人之由被仰出行

方奉行之

七日 己巳天晴 將軍家御聚鶴里八幡宮

供奉人

公卿

土御門中納言 顯方卿

六位二位 顯長卿

坊門三位 基輔卿

殿上人

御櫛 陪膳 一條中將能清朝臣

冷泉少將隆茂朝臣 中御門少將宗出朝臣

二條少將雅有朝臣

中御門新少將實信朝臣

讚岐守師平朝臣 坊城中將公敦朝臣

唐橋少將具忠

一條侍從公冬

前駈

御帽子後、中務權少輔重教

赤塚左近藏人資茂

安藝掃部助大夫親定

布衣

武藏前司

同五郎

尾張前司

同左近大夫將監

遠江前司

同右馬助

越後守

同四郎

相摸太郎

同三郎

同七郎

刑部少輔

治部權大輔

御餽役、彈正少弼

新相摸三郎

民部權大輔

遠江七郎

那波刑部少輔

和泉前司

宮内權大輔

佐々木壹岐前司

武藤少卿

後藤壹岐前司

同次郎左衛門尉

木上權頭

伊賀前司

上総前司

同三郎左衛門尉

縫殿頭

日向前司

周防前司

同六郎左衛門尉

甲斐守

大隅修理亮

式部太郎左衛門尉

城六郎

常陸次郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

武藤右近將監

大多和左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

御者土肥四郎左衛門尉

伊豆太即左衛門尉

出羽八郎左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

御監鎌田圖書左衛門尉

善五郎左衛門尉

進三郎左衛門尉

平賀三郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉

長次郎右衛門尉

帶^{タイスケンラ}尉

出羽七郎左衛門尉

和泉三郎左衛門尉

武藤左衛門尉

城五郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉

加藤左衛門尉

上総次郎左衛門尉

同四郎

鎌田三郎左衛門尉

式部次郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

武左新左衛門尉

大曾彌太郎左衛門尉

薩摩十郎左衛門尉

肥後四郎左衛門尉

九日 辛未 於前濱有御的始射手之試相摸太
即殿令監臨給工藤三郎右衛門尉光泰候御共奉
行之此外南部次郎小笠原彦次郎等為御共越後
守實時故障子息四郎主相具平左衛門尉實俊
行向同奉行云射手十二人一五度射之
一番

二官彌次郎

横地左衛門次郎

二番

桑原平内

周积兵衛四郎

三番

濫谷新左衛門尉

望月余一

四番

横溝彌七

平嶋彌五郎

五番

本間彌四郎左衛門尉

小嶋又次郎

六番

平井又次郎

木曾六郎

射記之後被定仰云今度令勒人數不幾之上各宜令皆察者

十日 壬申天晴 昨日、射手之中、桑原平内、横溝

彌七等申障之間有許容、以此、外、射手可為五番由

云。今日御所御鞠始也、延尉三人、列人數、所謂出羽

大夫判官行有、下括、上野、大夫判官廣經、上括、足利

大夫判官家氏等也、爰刑部卿傾申云、上括、雖有避

造之例、非吉事、尤可有斟酌云、而二條、少將雅有申

云、如承元二年十二月二日、雅經卿記者、賴時白襖

袴上括凡檢非違使上括事非常儀蹴鞠之時無憚
 歟後白河院御時納賴和康上括當院御時一蘭判
 官重輔同又上括然者有何事哉云是則出羽者就
 難波之訓上野足利者隨二條之說云二人長者根
 元雖受一流之口傳枝葉勘出兩樣之故實者歟其
 邪正人難辨之云云
 十四日 丙子霽 御的始射手十人二五度射之
 今日越後守不出仕相摸太郎殿一所令奉行之給
 云云
 一番
 二宮彌次郎時光
 横地左衛門次郎長重

二番

本間彌四郎左衛門尉忠時
 小嶋弥次郎家範

三番

望月余一師重
 周枳兵衛四郎頼泰

四番

平井又次郎有家
 木曾六郎隆俊

五番

澁谷新左衛門尉朝重
 平嶋弥五郎助經

廿五日 丁亥 來月七日御息所依可有御祭鶴
置八幡宮注供奉人數可進覽但於如田舎人者不
可書加之由被仰小待所行方傳之云則注之被進
上云

廿六日 戊子 天晴 來月可被始二品御精進仍
注可令參籠之人數可進覽之由被仰出云且此衆
可兼御息所御祭宮供奉

今日和歌御會始題讀師紙屋河二位直衣講師中
御門侍從宗世朝臣布衣也右大辨入道真親
相州武州越前々司時弘左近大夫將監茂政壹政
前司基政掃部助範元錄田次郎左衛門尉行俊上
布等搆此席

二月大

二日 甲午 霽 今年辛酉也仍將軍家被行御祈
等天地災變宣賢朝臣 天曹地府資俊朝臣七座
泰山府君晴秀國繼泰房晴成以平泰繼文元靈所
七瀬祭職宗茂氏重氏晴尚親貞晴行維行和泉前
司行方奉行之

七日 己亥 霽 將軍家二所御精進始未刻御息
所令詣鶴置宮御初度先茂氏役送參中御所
勤御杖彈正少弼業時候障膳周防五郎左衛門尉
候役送御襖越前々司役送信濃次郎左衛門尉供
奉人著淨衣將軍家御精進中參籠人可供奉之由
兼日雖有其定人數不足之間被催加之云

供奉人

淨衣シヤクエ

御輿ミコノコ寄ヨセ

武藏前司朝直トモナフ

共侍トモニシラセ

淨衣シヤクエ

立タテ

烏帽カウバウ

子コ同トモ

尾張前司時章アキラ

侍シ

同トモ

直ナカ

垂タラシ

同左近大夫將監ナカ

衣キ

白シロ

直ナカ

垂タラシ

彈正少弼タマシラ

侍シ

一人ヒト

淨衣シヤクエ

御幣ミコホウ役ヤク

越前エチノフ

々々

司シ

侍シ

一人ヒト

同トモ

上ウヘ

越後四郎顯時エチノフ

相摸アハカシ

三郎時輔サネノブ

侍シ

折オリ

烏帽カウバウ

子コ

淨シヤクエ

同七郎宗頼ナナノ

侍シ

一人ヒト

立タテ

烏帽カウバウ

子コ

淨シヤクエ

遠江七郎時基トホノ

同上ドウジョウ

木立キダテ

權頭ケントウ

雜色サカシ

一ヒト

兩フタ

筆フデ

和泉前司行方ニギハヤヒ

具ツク

淨衣シヤクエ

折オリ

烏帽カウバウ

子コ

少コ

童コ

同三郎左衛門尉行章サネノブ

秋田アキタ

城シロ

介ケ

具ツク

雜色サカシ

一ヒト

兩フタ

同六郎顯盛サネノブ

日向ミナソト前マヘ司シ祐ユキ泰タカ

武藤少卿景頼タケノカミ

具ツク

周防スウヘ前マヘ司シ忠タカ經ツネ

淨衣シヤクエ

同五郎左衛門尉忠景サネノブ

加賀カガ兵衛ヘイヱ大夫ダイフ親チカ氏ウヂ

常陸トコノ次ツグ郎ノ左衛門サヱモン尉ヱ行ユキ清キヨ

信濃シノノ次ツグ郎ノ左衛門サヱモン尉ヱ時トキ清キヨ

出羽デヱ七郎シチノ左衛門サヱモン尉ヱ行ユキ頼タカ

薩摩サツマ七郎シチノ兵衛ヘイヱ尉ヱ祐ユキ能ノ

土肥ツチヒ四郎シノ左衛門サヱモン尉ヱ實サチ經ツネ

隱岐カクシ四郎シノ左衛門サヱモン尉ヱ行ユキ長チカ

武石タケイシ新ニホ左衛門サヱモン尉ヱ長チカ胤ノ

十一日ユヱノヒ

亥ケイ外ソト齋イハヒ

二所ニトコロ

奉幣ホウヘイ

御使ミコトシ

相摸アハカシ

三郎時村サネノブ

主進ヌシノマシ發ツク

今日ケノヒ

鶴ツル置オケ臨リン

時祭トキマツリ也ナリ

尾張オウヱ前マヘ司シ時章トキアキラ

爲タシ

奉幣ホウヘイ

幣ヘイ

御使

十五日 丁未 雨降申尅二所奉幣御使相摸三

即歸衆今日自走湯山歸著云

廿日 壬子天晴 未尅春雨屢灑修理替物用途

并境飯役事充課百姓事永停止之以地頭得分可

致沙汰之由被定之

今日於鶴里八幡宮被行仁王會講師宮寺別當僧

正隆辨讀師辨法印審範當社請僧百口勝長壽院

慈寺鶴里等四箇所供僧分八十三口十七口者長

福寺安祥寺兩僧正并左大臣法印嚴惠等宿老僧

請加之為宮寺安藝左近大夫親經左所役伊達右

衛門藏人右所役等取布施宗民部十郎矣部次郎

太郎等為手長中山城前司盛時奉行之

請僧

左方

新阿弥尼タタ堂

法印權大僧都清尊

房源

永福寺

權少僧都道繼

永福寺

雅賢

大慈寺

長尊釋迦堂

勝長壽院

聖尊

鶴里

定憲

勝長壽院法印弟子

俊承

鶴里

慈曉

永福寺

暹慶

永福寺

圓譽

安祥寺僧正弟子

印教

新阿弥尼タタ堂 兼伊

同キ 重賢

自餘略之

佛布施

出羽翁百疋

誦經物

與布百端 並安寺

講師

綾被物三重

絹裹物一 緞與布三段

上絹十疋

染絹一端

白布一段 結之

淺黃十端

色革一枚

供米一石 短冊 後日

讀師 同 誦師

別布施

綾被物一重

紙裸物一ツ

袋米一ツ 以テ立文短冊

廿五日 丁巳

海道驛馬御物送夫事御使上下

向每度依犯定數為士民及旅人愁之由頻達上聽之間今日所被節六波羅也其狀云

早馬事

宿々被定置二疋之處雖非急事近年連々下向之輩或三四疋或四五疋申載著帳煩役於路次致狼藉之由有其聞尤不便自今以後非殊率爾事之外可任先例之狀依仰執達如件

文應二年二月廿五日

武藏守

相摸守

陸奥左近大夫將監殿

京下御物送夫事

京下御物送夫任雜掌申請無左右依令下知人夫多々之間民之煩尤不便自今以後申請人夫之時令見知御物多少定人數可載長帳也且於

私物送失者一向可令停止也。兼又夫役寄事於左右於路次不可致狼藉之由可被加下知之狀。依仰執達如件。

文應二年二月廿五日

武藏守
相摸守

陸奥左邊大夫將監殿

廿六日 戊午霽 改元詔書案著去廿日改文應

二年為弘長元年。

廿九日 辛酉天霽 關東御分寺社殊可興行於

神事之由日來有其沙汰今日被始行之。

一 諸社神事勤行事

祭豐年不奢凶年不儉是禮典之所定也而近年

神事等或陵夷背古儀或過差忘世費神慮難測。人有何益自今以後恒例祭祀不致陵夷臨時禮奠勿令過差矣。

一 可修造本社事

有封社者任代之府少破之時且加修理若及太破言上子細者隨其左右可有其沙汰之由被定置訖而近年社司恣貪神領利潤無顧社壇之破損匪啻不恐神慮專可謂忘公平自今以後於背此制法輩者可被改補其職矣。

一 可令如法勤行諸堂年中行事等事

右諸堂之勤恒例有限而供僧等纔有勤修之名更無抽誠信之志被補其職之跡雖有法器之清

撰被補其職之後多用淺薄之代官以羸弱之手
代勤嚴重之御願太不可然禁忌再規所勞之外
用代官事一切可停止兼又供料不法未下相積
之由諸堂有訴訟云雜掌云寺務之知行有限之
役所何可道迴應輪之濟物哉而於引付雖有其
沙汰猶以不事行歟殊可有嚴重沙汰之由重而
之可被仰引付此土有不法雜掌者隨奉行人由
申可被改易其職矣

一 可令諸堂執務人修造本尊事

右在神社修理可有其沙汰矣

一 佛事間事

右堂舍供養之人報恩追善家不測涯分多費

產事於供佛布施僧猶不成民庶黎元之煩還可
招罪根更非殖善苗偏是住名聞之故歟付真付
顯其何益自今以後修佛事之人只專淨信宜停
止過差矣

又關東祇候諸人家屋之營作出仕之行糶以下事
可令停止過差之由被定之云此外嚴制數箇條也
後藤壹岐前司基故小野澤左近大夫入道光蓮等
為奉行

一 放生會棧敷可用儉約事

一 可停止博奕事

一 鎌倉中橋修理并在家前々可掃治事

一 可禁制弄病者孤子死屍於路邊事

念佛者招寄女人以下事

僧徒畏頭橫行鎌倉中事仰禁之

鷹狩神社供祭外可令停止事

早馬事

有變急々時為聞達也而近代雖非大事以早速為其詮頗為人馬之煩然者自今以後非殊重事之外可止急速儀之由可被仰六波羅矣

一 長者事

百姓等有其煩一向被止之勅鎌倉祇候之御家人等還又可有其愁自今以後充給日食可召仕之矣

五日 丁卯

引付沙汰不事行之由訴人等愁訴

之趣達上聞之間今日有評議向後無懈緩之儀早速可申沙汰也於徒拘持奉行人等者頭人就注申可被處重科之旨被觸仰引付云

十三日 乙亥霽 未尅政所之郭内失火應屋公文所問注屋炎上御倉等者免災

廿日 壬午雨降 今日評定衆召連署起請常陸

介入道行日依不加判可離其衆次引付衆等進別紙起請亦新制事今日始施行之引付鎮番被改之

一番 二一日廿二一日

武藏前司朝直

縫殿頭師連

清左衛門尉滿定

出羽前司入道々空

伊勢前司入道行願

式部太郎左衛門尉光政

皆言大炊助文幸
嶋由五郎左衛門尉親茂

二番 七日。廿七日

尾張前司時章
筑前々司入道行善

直講教隆
官内權大輔時秀

進士次郎藏人光政
明石左近大夫兼經

對馬左衛門次郎

三番 三十一日。十三日

越後守實時
刑部少輔教時

上総前司長泰
大田民部大夫康宗

江民部大夫以基
長田左衛門尉廣雅

佐藤民部次郎業連

四番 七日。廿一日

和泉前司行方
前太宰權少貳入道蓮佐

對馬前司倫長
刑部權少輔政茂

壹岐前司基政
山城前司俊平

山各中務大夫俊行
雜賀太郎尚持

五番 十二日。廿七日

秋田城介泰盛
太宰權少貳景頼

伊賀前司時家
信濃判官入道行一

隱岐大夫判官行氏
中山城前司盛時

佐藤民部大夫行幹
山各進次郎行直

齊藤次朝俊

廿五日 丁亥霽
近習人々之中以歌仙被結番

各當番之日可奉五首和歌之由被定下冷泉侍從

隆茂持明院少將基盛越前之司時廣遠江次即時
通臺岐前司基政掃部助範元錄田次郎左衛門尉
行俊等為其衆。

四月六

廿一日 壬子 依可有入御于奥州禪門極樂寺

亭被相催供奉人可為直垂立烏帽子之由云。

廿三日 甲寅 兩降相摸太郎殿十一歲御嫁娶

女房自其繩亭御出之時掃部助範元候御

身固為此御祈自去廿二日天曹地府兜祖靈氣等

祭勤行之云。

廿四日 乙卯天晴 將軍家御騎馬入御于奥州

禪門極樂寺新造山庄御息所同渡御相州禪門豫

令候給

供奉人

御所御方 騎馬

土御門中納言

足利大夫判官

尾張左近大夫

武藏五郎

和泉前司

佐々木壹岐前司

式部太郎左衛門尉

步行

御劔 遠江右馬助

常陸次郎左衛門尉

相摸太郎

備前々司

相摸三郎

秋田城介

中務權少輔

木工權頭

城六郎

同九郎

信濃次郎左衛門尉

大隅修理亮

薩摩七郎左衛門尉

武藤左衛門尉

兼作兵衛藏人

甲斐次郎左衛門尉

周防五郎右衛門尉

大曾彌太郎左衛門尉

土肥四郎左衛門尉

隱岐四郎兵衛尉

武石新左衛門尉

三村新左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

中御所御方十カ騎馬

御興寄ヨロ刑部少輔

同彈正少弼

越後右馬助

新相摸三郎

遠江七郎

越後四郎

宮内權大輔

三河前司

武藤少卿

後藤壹岐前司

加賀守

步行

城五郎左衛門尉

出羽七郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉

小野澤次郎

明白依可有御笠懸射事カサカケ太郎殿トウロウ禊候人并シホ可然シカ諸家々人等シロヤ可被催具之由シヨ行方カケ景頼カゲノリ奉仰ホウ觸申フク侍所サシ云云

廿五日

丙辰

於極樂寺御弟有御笠懸

射事

相摸三郎

同七郎

遠江七郎

城五郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

大隅修理亮

甲斐三郎左衛門尉

城彌九郎

上総太郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

小野澤次郎

武石新左衛門尉

三浦六郎左衛門尉

信濃次郎左衛門尉

次有小笠懸而近代強不翫此藝之間凡無堪能之人最明寺禪室覽之有御自讀於小笠懸藝者太郎尤得其體召之欲令射云上下太入興于時太郎殿御座鎌倉御亭仍以專夫被奉請之為城介泰盛奉行用意御物具等御馬長崎左衛門尉就之御的武

田五郎三郎造進工藤次郎右衛門尉立之既列馬

場被出御馬號鬼鶴毛之處此御馬兼慣于遠笠懸

之間欲馳過的前仍被制弓引目被留御駕受禪室

一度通之後可射之由被仰之時一度馳過後令射

給其御矢中于的串一寸許之上的如塵而擧于御

烏帽子上則自馬場未直馳歸鎌倉給諸人感聲動

搖暫不止將軍家御感及再三禪室至吾家夫相當

于可受繼器之由被仰云

北五日 丙辰天晴 酉尅將軍家自極樂寺還御

北六日 丁巳 亥刻前隼入正從五位上藤原朝

臣光重法師法名心卒

北八日 巳未天晴 入夜雨降今日午尅量見其

色青黃赤白也

五月小

一日 壬戌 夜半大倉稻荷邊聊物念彼社壇此間連々有會合之輩今夜々行衆怪之欲擗取之故也悉遜散云

五日 丙寅 御所有和歌御會紙屋河二位右大辨入道越前々司陸奥左近大夫將監後藤壹岐前司等衆會云

十三日 甲戌 今日晝番之間於廣御所佐々木壹岐前司泰經與澁谷太郎左衛門尉武重及口論是泰經以武重有稱爲大名之由事武重咎之云已巨朝野之詞也於當時全非大名先祖重國號澁谷

庄司者誠相摸國大名内也然間貴邊先祖佐々木判官定經于時號太郎牢籠之當初者到重國之門寄得其扶持子孫今爲大名歟云泰經云東國太少名并澁谷庄司重國等皆官平氏莫不蒙彼恩顧當家獨不諛其權勢并譜代相傳佐々木庄偏運志於源家遷往相摸國尋知音之好得重國以下之助成繼身命奉逢于右大將軍草創御代抽度々之勲功兄弟五人之間令補十七箇國守護職剩面々所令任受領檢非違使也昔牢籠更非耻辱還可謂面目之始重國以秀義爲掣之間令生隱岐守義清訖被用掣之上夫非馬牛之類爲人倫之條勿論歟此上令過言頗荒涼事歟云列座衆悉傾耳敢不能助言

云

六月大

一日 辛卯 奥州禪門俄病惱彼邊諸人群集今

日於廁被見怪異之後心神惘然云

三日 癸巳雨降 申刻御所北對西端與堂所東

間海黑鳥海鴨云云又其ノ飛落和泉前司行方即從

等獲之即被放海邊

六日 丙申霽 為和泉前司奉行昨鳥怪事於御

所被行御占晴茂朝臣已下病事火事之由勸申此

鳥貞應元年四月死寄前濱腰越等同年八月彗星

出現云

七日 丁酉天晴 於御所被行百怪祭三座為親

職宗茂氏等奉仕之政所沙汰也

十日 庚子天晴 將軍家依變異等事有御物忌

但非堅固之儀外宿人參入也有評議如此云

十二日 壬寅 來八月放生會御參宮供奉人事

自小侍所任例注交各為申下御點被付武藤少卿

景願云

十六日 丙午天晴 奥州禪門違例事去朔日以

後每日晚景發動如癩病仍自同十一日屈詰若宮

僧正令加持之契來廿一日可及減氣之由今夜僧

正被申之數輩賢息并縁者祇候人等聞之面々成

奇異之思云

十七日 丁未 供奉人事被下御點又此外

隨兵

相摸三郎

直垂

城十郎

佐々木壹岐四郎左衛門尉

筑前次郎左衛門尉

以前四人事自御前直如此被注下云

十八日

戊申霽

依廣御所修理於北小庭被行

土公祭為親朝臣奉仕之太宰權少貳景頼奉行之

波多野出雲次郎左衛門尉時光為御使

廿一日

辛亥

足立太郎左衛門尉可為放生會

隨兵之由被仰之處當時所勞難治得減者可參之

由造請文云

廿二日

壬子霽

未尅諷方兵衛入道蓮佛平左

衛門尉盛時等於龜谷石切谷邊生勇故駿河前司

義村之子息大夫律師良賢是依有謀叛之企也駿

河八郎入道

式部大夫并野本尼

若狹備前司已下其

張本數輩云依之錄倉中騷動入夜近國御家人等

馳聚云奥州禪門病惱今夕平愈心神復本云

廿三日

癸丑晴

相摸禪師嚴齋入滅畢

廿五日

乙卯

良賢事被仰遣六波羅為鎮都鄙

騷動也其御教書云

大夫律師良賢若狹前司依有謀叛之企被召取

其身訖指無與力之輩候也依此事在京并西國

御家人等令參向者如先々可被止置也隨無殊

事之由。面之可被相觸者。依仰執達如件。

弘長元年六月廿五日

武藏守

相摸守

陸奥左近大夫將監殿

今日奥州禪門被遣馬并南庭五。劔等於若宮僧正坊。又室家生衣二。南庭三。綸三十疋。武州劔。南庭二。等同衣遣之。依所勞之平減也。

廿七日 丁巳 新相摸三郎時村。特放生會。隨兵

是去廿三日。兄阿闍梨入滅。輕服故也。依之小待所司平。忠左衛門尉實俊。相觸和泉前司行方。間有沙汰兄弟。輕服日數為五十日。八月十五日者。猶日數內也。可有憚否。可尋問宮寺者。行方相尋先規於鶴

里別當僧正隆辨之處。於隨兵者。候廟庭外之間。先

例不憚之由。報申。仍無殊寄。

廿九日 己未 阿曾沼小次郎。依落馬。辭申放生

會。隨兵云

廿日 庚申 霽 午。尅。鳥飛入。自御所。臺所。東。薮。間。

且中障子。出北。遣戶。依之。為景賴奉行。被行御占之

處。晴茂。職宗等。御病事之由。申之。

七月大

二日 壬戌 放生會。所役。辭退。董事。行賴。景賴等。

就執申之。有其沙汰

隨兵

駿河五郎

三浦介六郎左衛門尉

各勤流鏑馬之間兩役難治之由申之

城九郎

依為城介分流鏑馬、射手之由申。

阿曾沼小次郎

落馬之由申。

於以前兩人者自身非射手者不可有恩許早如元散狀可為隨兵兩役事傍例更無御免者次至長景者為射手之上者可被免者次光經者依落馬著甲曾事為難治者著布衣可令供奉者各被仰此旨實俊奉行之。

三日 癸亥天晴

於御所被修五尊合行法若宮別當僧正奉仕之伴僧八口云是聊依有御憫也。

九日 巳巳

放生會隨兵被差定之中江戸七郎太郎者老子病斗會難著鎧之由依申之有恩許和

泉六郎左衛門尉姓婦昨日八日嬰兒死之由申之

勿論云景頼為奉行云

十日 庚午天晴

五尊御修法鎮願云又自今夕依可被修別御祈為左大臣法印壇所於御所近邊

被點入々宿所行方承仰相觸平置左衛門尉工藤

三郎右衛門尉筆之間兩人點進其所云

十一日 辛未

明日依可有入御山内殿可催供奉人之由被仰出云

十二日 壬申雨降

將軍家御騎馬入御最明寺第覽片鞠競馬相撲等勝負亦管絃詠歌以下有御

遊宴等_云

供奉人

足利_{アリカシ}大夫判官

彈正少弼

相摸三郎

武藏五郎

宮内權大輔

武藤少卿

城六郎

薩摩七郎左衛門尉

步行

美作兵衛藏人

越前之司

尾張左近大夫

遠江七郎

秋田城介

後藤壹岐前司

式部太郎左衛門尉

信濃左衛門尉

城九郎

和泉三郎左衛門尉

武藤左衛門尉

遠江十郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉

佐々木_キ壹岐三郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

鎌田次郎左衛門尉

大泉九郎

中_{ナカ}御所御方_{騎馬}

刑部少輔

武藏左近大夫將監

出羽七郎左衛門尉

周防五郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉

同四郎兵衛尉

土肥四郎左衛門尉

肥後四郎左衛門尉

武石新左衛門尉

陸奥左近大夫將監

遠江左馬助

民部權大輔

和泉前司

佐々木壹岐前司

城四郎左衛門尉

相摸七郎

木工權頭

新田參河前司

常陸次郎左衛門尉

步行

同十三日。還御之時。騎馬。

大隅修理亮

城五郎左衛門尉

同十郎

周防四郎左衛門尉

上野太郎左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉

大曾禰太郎左衛門尉

鎌田圖書左衛門尉

小野澤次郎

十三日 癸酉天晴

晚頭將軍家自山内還御令

日工藤三郎右衛門尉光泰依有故障放生會供奉

人散狀等記。一向被行。平岳左衛門尉實俊。又中

御所。御方自今以後。依可被始護身為御驗者。休所

於御所近邊被點入々。宿所向後。可為巡役之由。被

仰下之行方為奉行云

可被點宿所入々

花山院中納言 御免

尾張前司

上総前司

秋田城介

出羽入道

常陸入道

後藤壹岐前司

和泉前司

筑前入道

新田三河前司 重役間 御免

木工權頭

圖書頭 御免

薩摩七郎左衛門尉 同

周防五郎左衛門尉 同

十四日 甲戌天陰 月蝕不現

十七日 丁丑霽 京都使者桑著申云去七日龜

山仙洞御車宿燒亡失火諸人群桑打銷之間不及

他所云

十八日 戊寅霽 三位權僧正賴兼入滅七十七

大納言師賴卿孫證遍僧都真弟子公胤僧正入室

受法對覺朝僧正灌頂顯密兼學公家證義 上皇

熊野御幸御導師自關東嘉禎元年十二月十八日

轉權大僧都元少僧都四年五月廿三日叙法印公清勞

建長六年十二月卅日任權僧正八年月日補園城

寺別當于時号法性房

廿二日 壬午天晴 政所門并廳屋等新造事有

其汰沙今日關東近古詠可撰進之由被仰壹岐前

司基政

廿九日 己丑 武藏前司筑前入道行善常陸入

道行日等放半會之時可參侯于廻廊之由可相觸

之旨被仰下云隨兵之中在國輩四人進辭退請文

昨日自リコサレ小侍所付武藤少卿景頼之間今日披露此

外條々有其沙汰云

足利太郎左衛門尉

淡路又四郎左衛門尉

相馬孫五郎左衛門尉

佐竹常陸次郎

以上被聞食訖之由云

當時所勞得減者可參之由申六月廿一日自請文

指得持病者可參之由申七月六日自請文

現所勞之由申七月十日自請文

有所勞之間雖免未本復之由申七月十二日自請文

在錄倉人之中申障

尾張前司

治部太輔

上総前司

周防三郎左衛門尉

出羽三郎左衛門尉

以上勞之由申

島山上野前司

官人事

足利大夫判官家氏

出羽大夫判官行有

以上三人被催促之處行有行氏者已辭職訖蒙在

越前々司

周防守

佐渡五郎左衛門尉

宇都宮五郎左衛門尉

當時所勞得減者可減之由申

隱岐大夫判官行氏

上野大夫判官廣經

國恩許之由捧請文廣經者申領狀家長者當時在

國之間可被催否去廿七日於相州禪室御所有沙

汰可申評定之由治定仍今日實俊光泰等披露之

處早可相催者則被成下御教書云

廿日 庚寅 鎌田次郎左衛門尉善六郎左衛門

尉等屬木工權頭親家望申放生會供奉親家内々

取御氣色觸申小侍所之間依可令披露付景頼云

八月小

一日 辛卯 鎌田次郎左衛門尉善六郎左衛門

次郎可催直垂著之由云景頼奉

二月 壬辰伊勢入道行願觸申小侍所云愚息頼

經三郎左衛門尉當時在國之處被加放生會供奉

人訖先立鹿食事云可有免許歟云

三日 癸巳 武藏五郎可為隨兵越後四郎著布

衣可供奉之由被仰下云

五日 乙未 小泉四郎左衛門尉可加直垂衆之

由云出羽藤次郎左衛門尉被仰可著布衣之旨之

處日數已迫之間將衣雖用意之由辭申云今日申

障之輩

城五郎左衛門尉始雖進奉令勞由申

伊東八郎左衛門尉

伯耆四郎左衛門尉

已上二人所勞之由申

七日 丁酉 駿河五郎辭退隨兵事始則勤仕流

鑄馬役之間計會之由申後亦稱所勞之由仍度々

被仰之處如去六日請文者病痾難治之間加灸之

趣也而當出仕之上者固辭不可然重可催之由云

又直垂著中伊勢四郎為父伊勢入道分流鑄馬射

手之由申之間無左右有恩許云

八日 戊戌 布衣供奉人依有其闕可加越中五

郎左衛門尉同六郎左衛門尉等之由被仰出云

十日 庚子 天晴 駿河五郎事去八日重催促之

處猶以難治之由載請文仍有其妙汰故障之趣雖

無其理如當時者隨兵有數輩歟可有免許之由被

仰出云又尾張守行有隱岐守行氏等著布衣可

供奉云御身固陰陽師此間九人也今日被縮六番

晴茂晴宗等重服之間職宗茂氏等為父名代勤社
 之而募彼勞効相并又共被召加以其例為親朝臣
 子息仲光又被召加之處範元申云父子可相并者
 仲光者範元下蔭也不可被超越云為和泉前司奉
 行有評議閤宿老之奉弱冠之類父子相並之條不
 可然之由被仰出職宗茂氏仲光等被除其衆仍本
 番衆晴茂宣賢為親晴秀資俊泰房等六人也

十二日 壬寅 放生會隨兵內常陸左衛門尉行
 清一人可候于先陣最前出羽七郎左衛門尉行賴
 者必可為後陣之由被定下云
 十三日 癸卯 為將軍家御願被奉御劍於諸社
 筑前次郎左衛門尉行賴奉行之次放生會御出之

間事條之有其沙汰先被定供奉人著座之所十五
 日者隨兵者如例可候西迴廊東方著得衣之輩者
 可為東迴廊前十六日者隨兵者埒門南左右在西
 南可著次座席事東者自腋門前迄于東而布衣人
 少々其次先陣隨兵可著西者自迴廊迄西而布衣
 人又少々其次可為後陣隨兵

次官內權大輔 長門前司
 宇都宮石見前司 大隅大炊助
 壹岐三郎左衛門尉 伊勢三郎左衛門尉
 等各依有麩食事時申供奉間事為行方景賴等奉
 行內々有其沙汰太自由也放生會以後殊可有其
 沙汰之由云

此間事平里左衛門尉實俊一人申沙汰之。工藤三郎右衛門尉光泰輕服之故也。而實俊奉行難仰之由。越州依被申之。自相摸。太郎殿被差副平三郎左衛門尉之間。座席事可存知之旨。被仰舍。

十四日 甲辰 放生會條々重有其沙汰。所謂立隨兵并布衣供奉人等次第可進覽之旨。被仰越後守之處。任位次於次第。不可及子細。不然者無左右難計申之由。以景頼被報申之。重仰云。不可依位次。且任家之清花。且分嫡庶。可立次第也。若於御持佛堂前公卿座。越州并武藤少卿等雖相談之。非位次々第者。凡難道行之間。猶言上其由。此上被止其儀云。次中御所。依可有御條被定供奉人。是平三郎

左衛門尉依可奉行下賜其散狀。如將軍家御共。若直垂者可候之。可令帶劔否。有沙汰不可然云。次伊勢次郎左衛門尉頼經。佐々木壹岐。四郎左衛門尉長經。鹿食谷事父壹岐。前司泰經。伊勢入道行願等。就愁申之評定。次及其沙汰。有御免云。次小野澤次郎山田彦次郎。可催加直垂著之由。被仰云。次供奉人等。於宮中可著座。次第被定之。兩方御棧敷之前。除御妻戸之外。布衣衆可候其下。除兩國司著座之前。東者可為先陣。隨兵座。西者可為後陣。隨兵座。云。十五日 乙巳天晴 鶴里放生會御息所。為覽舞樂渡御。御興。其後將軍家御出供奉人先陣隨兵。

武田三郎政經

小笠原六郎三郎時直

城六郎顯盛

兼人可備家前之由雖

常陸左衛門尉行清

三浦六郎左衛門尉賴盛

信濃次郎左衛門尉時清

足利上総三郎滿氏

千葉介頼胤

新相摸三郎時村

遠江七郎時基

武藏五郎時忠

御所御方

布衣

相摸大郎

刑部少輔

彈正少弼

尾張左近大夫將監

越後右馬助時親

民部權大輔

相摸三郎

越後四郎

木土權頭

和泉前司

佐々木壹岐前司

越中前司頼業

後藤臺岐前司

同新左衛門尉

縫殿頭

日向前司

尾張守行省

隱岐守行氏

大隅修理亮

武藤左衛門尉

甲斐三郎左衛門尉

上総太郎左衛門尉長經

善五郎左衛門尉康家

梶原太郎左衛門尉景經

伊勢次郎左衛門尉

紀伊次郎左衛門尉為經

御遊手長進三郎左衛門尉

帶劍タイスケシラ

肥後四郎左衛門尉 河内三郎左衛門尉祐氏
三村新左衛門尉時親 足立三郎左衛門尉
長次右衛門尉義連 加地七郎右衛門尉氏經

式部次郎左衛門尉光長 城十郎時景

武石新左衛門尉 周防六郎左衛門尉忠頼

筑前五郎左衛門尉行重

佐々木對馬四郎宗經

出雲次郎左衛門尉時光

足立藤内左衛門三郎政遠

後藤壹岐次郎左衛門尉基廣

宇佐義三郎兵衛尉祐明

薩摩新左衛門尉祐重

甲斐五郎左衛門尉為定 遠山孫太郎景長

小泉四郎左衛門尉頼行

善六左衛門次郎盛村

後陣隨兵

駿河五郎通時 武藏八郎頼直

遠江十郎左衛門尉頼連

武石三郎左衛門尉朝胤

小野寺新左衛門尉行通

隱岐三郎左衛門尉行景

大曾禰太郎左衛門尉 小田左衛門尉時知

土肥左衛門尉 完戶次郎左衛門尉家氏

河越次郎經重

出羽七郎左衛門尉行頼

中御所御方

布衣

陸奥左近大夫將監

相摸四郎

越前々司

武藏右近大夫將監

遠江右馬助

刑部權少輔

對馬前司

武藤少卿

伊賀前司

周防前司

加賀守

薩摩七郎左衛門尉

土肥四郎左衛門尉

出羽彌藤二左衛門尉

錄田圖書左衛門尉

甲斐次郎左衛門尉

足立三郎右衛門尉

梶原太郎左衛門尉

伊勢次郎左衛門尉

肥後四郎左衛門尉

越中五郎左衛門尉

出羽八郎左衛門尉

信濃判官次郎左衛門尉

伊賀次郎右衛門尉

伊東次郎左衛門尉

梶原三郎左衛門尉

近江三郎左衛門尉

上総四郎

善五郎左衛門尉

小野澤次郎

官人

足利大夫判官

上野大夫判官

廻廊參入々々

相摸守政村朝臣

武藏守長時

武藏前司朝直

十六日 丙午天晴

御參宮同昨流鑄馬以下如

例

九月大

三日 壬戌霽

辨法印審範長病已危急是依為

顯密之碩學殊所被賞翫也而今日申一赴相州禪室為最後御對面入御彼雪下北谷宿坊武田七郎南部又次郎工藤三郎右衛門尉光泰同木工左衛門尉等候御共審範於持佛堂奉謁顯密事理之法門重之雖令問答給及酉赴欲令歸給之刻禪室重被仰云最初行攝之願返々有憑云於宗門雖關大悟御尚以鎮行攝之緣給賢慮尤難量者歟

四日 癸亥天晴

申尅法印權大僧都審範入滅

年七熱田大官司散位季範曾孫法橋明季真弟子顯宗長辨法眼門弟最勝講々聽三會已誦密宗道禪僧正受法公緣僧正灌頂弟子

貞永元年鸛置入幡宮供僧

入夜女房帥局審範臨終正念之由申相州禪室之憂為哀傷之中御悅之由被感仰云

九月 戊辰天霽

大曾禰次郎左衛門尉盛經入

道家燒亡

十九日 戊寅

御息所為御服藥明日依可有

出御干山内亭供奉人事被迴散狀供奉人皆可著直垂御輿寄役人者可用立烏帽子云散狀有三通

一通騎馬。一通步行。一通御坐于山内殿之程令祇
候可勤仕御格子役以下之人數也。又小侍所司工
藤三郎左衛門尉光泰二所參詣之間著到等事暫
可令小野澤次郎時仲奉行之由被定云云
廿日 巳卯天晴 入夜若宮大路燒亡。今夕中御
所入御最明寺御弟為御服藥御藥湯等事暫可有
御座云云
供奉人

刑部少輔
相摸三郎
遠江七郎
武藏五郎

新相摸三郎
同七郎
越後四郎
秋田城介

和泉前司
武藤少卿
步行

宮内權太輔
後藤壹岐前司

城九郎長景
武藤左衛門尉
周防四郎左衛門尉忠泰
上野太郎左衛門尉景經
大曾彌太郎左衛門尉長賴
鎌田次郎左衛門尉行俊
武石新左衛門尉長胤
肥後四郎左衛門尉行定
佐々木對馬四郎宗經
出羽七郎左衛門尉
小野寺新左衛門尉行通
甲斐三郎左衛門尉

一宮次郎左衛門尉康有 小野澤次郎時仲

十月小 四日 癸巳天晴 將軍家入御最明寺御中御所
自去月有御坐之故也

供奉人

騎馬

土御門中納言

刑部卿 宗教卿

讚岐守忠時朝臣

越前之司時廣

彈正少弼

武藏左近大夫將監時遠

越後四郎

相摸七郎宗頼

武藏五郎時忠

木工權頭親家

參河前司頼氏

和泉前司

佐々木壹岐前司

後藤壹岐前司

武藤少卿景頼

尾張守行有

上野大夫判官重光

步行

御一相摸三郎時輔

城四郎左衛門尉時盛

同六郎顯盛

同十郎時景

薩摩四郎左衛門尉祐能

周防五郎左衛門尉忠景

武藤左衛門尉頼泰

遠江十郎左衛門尉頼連

小野寺新左衛門尉道經

美作兵衛藏人家教

甲斐三郎左衛門尉

隱岐三郎左衛門尉行景

鎌田次郎左衛門尉

武石新左衛門尉長胤

狩野四郎左衛門尉景茂
同日及晚兩所還御供奉人被催之
御所御方供奉人

越前々司

刑部少輔

彈正少弼

新相摸三郎

相摸三郎

武藏五郎

和泉前司

佐々木壹岐前司

武藤少卿

木土權頭

上野大夫判官

中御所御共

陸奥左近大夫將監

御輿寄相摸太郎

武藏左近大夫將監

相摸七郎

越後四郎

秋田城介

三河前司

後藤壹岐前司

宮内權大輔

尾張守

五日 甲午天晴

將軍家自山内還御

十九日 壬申

園城寺僧經仙朝僧正以下數輩

列衆評定所依本寺訴訟事也去十二日令下著

廿一日

庚戌天晴 政所廳屋以下屋々事始

廿四日

癸丑園城寺僧經等歸洛

廿九日

戊午陰 貢馬御覽如例

十一月六

一日 巳未天晴

前下野守正五位下藤原朝臣

泰經ヤスツキ年シ五十九シユウジウ卒ス時トキ在ニ京キョウ

二日 庚申天晴 貢馬貢金等進發京都

三日 辛酉霽 寅一點入道從四位上行陸奥守

平朝臣重時率年六十四樂寺別業自發病之始拋萬事

一心念佛住正念取終云

六日 甲子霽 寅剋奥州禪門葬礼云

七日 乙丑天晴 戌刻雷鳴

十一日 己巳 御祈之時為大阿闍梨壇所可被

點召宿所事可被召鞠懸樹事被定并其人數

越前之司 刑部少輔

武藏左近大夫將監 新相摸三郎

秋田城介 上野大夫判官

十二日 甲戌天晴 政所廳屋等上棟

廿二月 庚辰 押垂齊藤次郎被召加小侍所番

帳武藤少卿景賴申沙汰之云

廿六日 甲申 明年正月御弓始事有其沙汰被

差射手等相摸太郎殿越後守殿被下連署奉書云

十二月小

三月 辛卯天晴 新造政所始也評定衆等列衆云

云

新刊吾妻鏡卷第五十

